

# あかしなの 山里から

「フランスの旅」の巻

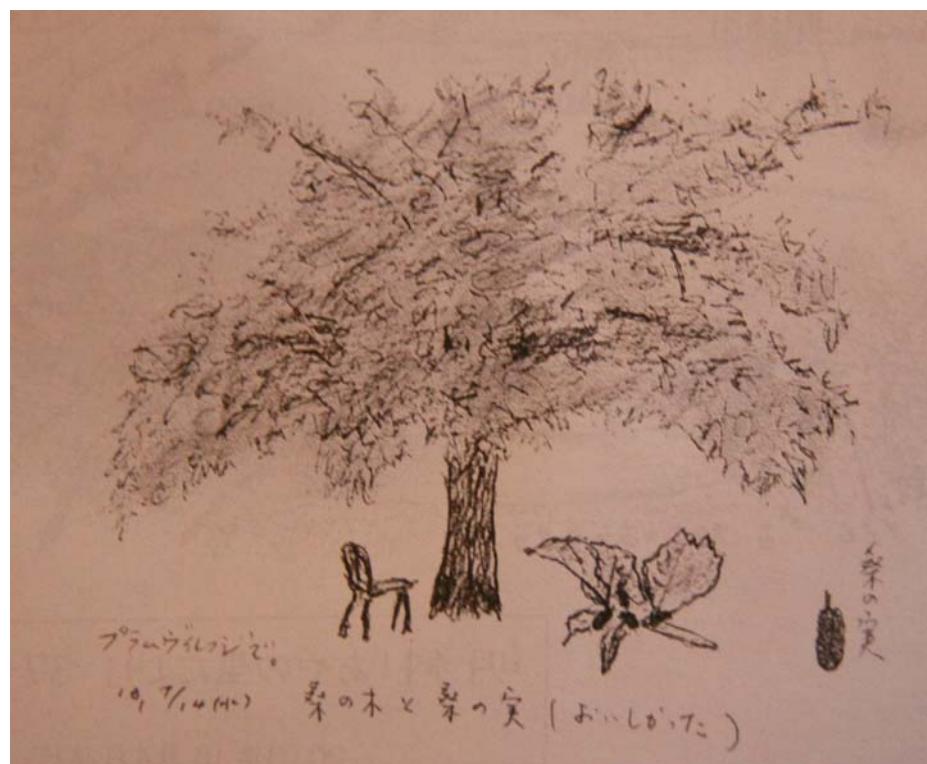


あかしな  
明料「あやの里だより」37号

2010年10月4日発行

# もくじ

出発前に	…	4
宿につく	…	6
ロダン美術館	…	8
パリは鷹揚	…	9
ヴエルサイユ宮殿	…	12
ノートルダム大聖堂	…	15
パリもバーゲンの真っ最中	…	16
鷹揚じやない改札口	…	17
フランス人は、みなとても親切	…	18
横道—授業料も無料	…	18
横道② ヴァカンス	…	21
横道③ ベトナム戦争	…	21
鷹揚でないフランス	…	22
ナチ支配下のパリ	…	23
核保有国フランス	…	25
おフランス史あれこれ	…	27
フランス史の印象—いくつか	…	28
パリの三日目	…	29
パリの地下鉄	…	34
美術館は、第一日曜日は、だれでも無料	…	34
公衆トイレがない	…	38
カフェだらけのパリとパリの車	…	39
ボルドーへ	…	40



二日目	— 食事は完全菜食	… 43
三日目	— 数十カ国の人気が集まつてくる	… 46
四日目	— リトリート・瞑想合宿 始まる	… 47
五日目	— アッパー・ハムレット・上の宿坊へ。	… 51
	微笑みを生きる	… 52
	ハン師の教えー今生きていることを楽しむこと	… 55
	— 気づくこと	… 56
	— 五つの気づき	… 57
	— 相互につながっている	… 58
	— 火の海に咲く蓮 「行動する仏教」	… 59
	— 平和は可能である	… 60
	— 愛とあわれみと和解	… 61
	お絵描きの先生になる の巻	… 63
八日目	— チャイさんたちのコンサート	… 66
九日目	— 最後の日 古稀の誕生会	… 68
ふたたびパリへ	… 72	
パリ祭の日	… 73	
バステイユ監獄跡	… 73	
僕約の旅	… 76	
パリ滞在最後の日	… 78	
帰国のハプニング	… 81	
バンコクーカオサン通りへ	… 82	
鈍行列車はファーストクラス	… 84	
あとがき	… 85	



## おお、おフランス

### —フランスの印象

出発前に



ティク・ナット・ハン師

ティク・ナット・ハン師は、今年八十四歳。

三十五年前に終結したベトナム戦争中に、敵、味方なく、人を助けたり、アメリカに行って戦争中止を訴えたり。そのときアメリカの黒人解放運動の旗手であるマーティン・ルーサー・キング牧師と出会い、この出会いの翌年、キング牧師にノーベル平和賞に推薦された人なんだそうです。

でも、ベトナム政府に帰国を拒絶されて、フランスに亡命を余儀なくされ、以来、フランスで、「プラム・ヴィレッジ」（すもも村）という名の仏教共同体を開き、その後も一貫して、主に欧米で『非暴力』による平和運動を実践してきた方ということです。

「まあ、行くなら、これぐらい読んどき」と言って、娘から、ハン師の著書を二冊渡されましたが、フランスに行く前は読めず、日本に帰つてからやっと読みました。

今年五月の初めごろだつたでしょうか。娘が、突然「フランスに行くねん」と言いだしてびっくり。  
貧乏なのになあ、と思って聞くと、ベトナム人のティク・ナット・ハンという、仏教徒のお坊様がフランスに住んでいて、そのお坊様が来年日本に来る、それに協力するため、本場に行ってみるのだ、ということです。  
別に娘に誘われたわけではありませんが、ヨーロッパつて、行つたことがないし、娘が連れて行つてくれるなら、これはチャンスかも…という考えが頭をよぎり、「そんなら、おかあさんも、行く」と言つてしましました。

「おかあさんも、行く」とは言ったものの、これまで、ティク・ナット・ハンというお坊様のことは全く知らず、あまり興味もなく、「娘が連れてつてくれるなら、チャンスやけど、でもお金もないし、忙しいしなあ…、でも、この機を逃がしたら、もう今後ヨーロッパになど行くことはないやろうしなあ…、それに、七月十三日で『古稀』（七十歳）

になるから、古稀のお祝い（自分で自分を祝う…）にもなるんやから、行つてもいいか…、とかあれこれ思つて、なかなか気持ちがはつきりしませんでした。

とにかく、今回の旅は、主に、ティク・ナット・ハン師が開いた「プラム・ヴィレッジ」（すもも村）に滞在する旅だそうなので、ふつうの観光旅行とは全く違う旅です。でも、せつかだから、パリにも何泊かしようと言つてくれました。まあ、私は、娘が連れてつてくれるなら、なんでもいいや、という、いいかげんな気持ち。

そんな旅で、高級ホテルに泊まるわけでもないので滞在費はとても安いのですが、その上に、安い航空運賃のキャンセル待ちをすることにし、キャンセルがなかつたら、あきらめよう、と二人で決めました。娘もあまりお金がないのです。

五月に大阪の実家に一週間ほど滞在していたある日、娘から、「やっぱりキャンセル、ないみたいやわ」という電話がかかってきて、「そうかあ。そんならおフランスはあきらめやなあ。別にいいけど…」と答えました。すると、その次の日、また娘から電話がかかってきて、「おかあさん、キャンセルあつたよ。ほんまにおかあさんも行くん?」と聞

きます。そこで、四の五の迷わず、ええい、思い切つて行つちゃえ、と決心した次第です。

それでも、ずっと大忙しの日々がつづき、七月一日の出发の当日早朝も、「平和の種」の一八号の最終チェックをし、その編集原稿をAさんに送り、ブルーベリーが、私のいない間にヒヨドリにやられては悔やしいと、発つ直前にタコ糸をまきつけたり、などなど、一分一秒を惜しむドタバタさわぎ…。

（おかげで、ブルーベリーは、留守中、ヒヨドリなどに食べられないで収穫できました。）

でも、「平和の種」の方は、大大ミスがあつて、私の留守の間に印刷やら発送やらの仕事をして下さつた方や読者の皆さんにも大迷惑をかけてしまいました！）

今年は、ちょうどフランスに発つ一ヶ月前に重いぎつくり腰になり、出発の時は、なんとか治つたばかりでしたので、「おかあさん、だいじょうぶなん?」と娘にも不安がられましたが、重い荷物を持ってくれたりする、只働きのツアーコンダクターの娘のおかげで、無事に旅をすませることができました。

ちょうど九年ぶりの海外です。私は、日頃から、旅と言

えば、ふるさとの大阪に行くくらいで、ほとんど旅行もないし、とくに海外に旅したいともおもわず、友人に誘われると、じゃあ、行つてもいいな、という気になるくらい

なのです。家で、畑やら、家のかたづけしたり、本を読んでいたりできれば、けつこう満足するタイプです。ですの

で、いつも降つてわいたように、旅に行くことになります。

今回の旅は、古稀を前にして、ほんとうに「降つて湧いた」旅だったのです。

## 出発

七月一日の夕方発のタイ航空の飛行機に乗る予定で、朝七時すぎに安曇野市の家を出て、電車で東京まで出ました。娘が東京で、プラム・ヴィレッジで尼さんをしている日本の女性から頼まれた買い物をするためもありました。買い物がけつこう時間がかかるて、ぎりぎりに成田空港着。

夕方に成田空港を出発。タイ航空の飛行機です。深夜十

一時ごろにタイのバンコクにつきましたが、あいにくの大雨で、出発時間が遅れ、空港内で数時間仮眠しました。

とても立派な、新しい空港です。一年ほど前のことにな

りますが、空港内が多数の人々に占拠されていたというのが、嘘のような静けさです。  
せんきょ

日本時間で午前三時半ごろにバンコクを発ちました。  
た

機内の席は、幸い窓際の席でした。私は断然、窓際が好きです。せっかくの飛行機。空から下界を見たいではありませんか。飛行機に乗つてイヤホーンでテレビを見るなんて、つまらないかぎりです。

娘が、お母さんは窓際が好きだからと言つて、窓際に座らせてくれます。

数百人、ぎつしりの飛行機です。

タイのスチュワーデスさんたちは、みなとても美人。美しい民族衣装をまとつてらして、眼の保養になります。激務なのに、みなさん微笑を絶やしません。ちょっと前に、日本のスチュワーデスさんたちを主人公にしたおもしろい小説を読んだので、笑顔の裏に、激務があることを多少なりとも知っています。（井上文夫作「時をつなぐ航跡」新日本出版社）

飛行中にも食事が出来ます。今回はわりとい簡素な食事でしたが、パンとジュースやワインなどは、飲み放題。それでもガソリンを大量に使う高度一万メートルの空

の上、食事は、ほんの最低限でいいのになあ、と思つてしましました。飛行機は、空気をひどく汚すので、飛行機のチケットには、環境税をつけるとかすればいいのに、とも思つたりしました。

フランスでは、すでに、世界の貧困や環境悪化防止のための支援資金として、国際連帯税というのが、航空チケットにつくようになっているそうです。日本でも検討中とか。

さて、機内の狭い座席の上で、あまり疲れぬまま、夜明けを迎えます。いよいよフランスの大地が見えてきました。着陸予定のシャルル・ド・ゴール空港は、パリ市街から少し離れているとはいえ、高度が下がつて空港が近くなつても、見渡す限り、畑、畑です。街らしいところは見当たりません。

畑の間に、ところどころ小さな森があり、村の集落らしい家屋のかたまりもちらほら見えますが、山のない平らな大地の上に、くつきりと区画された田野がひろがります。

フランスが農業大国であることを実感しました。

ちなみに、フランスの食糧自給率は百二十%だそうです。食糧の輸出国です。反対に、日本の自給率は四十%しかない、というのは、よく知られています。ただし、山国日本

とちがつて、フランスは耕地面積が国土の五十四%もある上、農業に対しても、国家の手厚い助成があるようです。  
(ウイキペディア・フリー百科事典などによる)

空港に着いたのが現地時間で朝八時。時差が七時間ありますから、日本でいうと、午後の三時。前日の夕方出発しましたから、けつときよく、パリに来るのに、一日近くかかりましたということになります。



おお、おフランス！

さて、旅の道程は、娘が、図書館から借りてきた本で、いろいろ調べて、決めています。私はまったくの白紙状態。すべて娘におまかせです。

娘の借りている図書館の本は、最新のフランス情報誌。フランス滞在中、必需品としてずっと旅のお供をしてくれ

ました。こんなに有意義？に使われた図書館の本も少ないことでしょう！

空港を出ると、まずは電車で、パリ市内の宿に急行しました。

電車の空港駅に黒人の一家がいました。その中に、とてもかわいい十歳たらずの少女がいて、いつしょに写真を撮らせてもらいました。フランスは移民の多い国、というのをさつそく感じさせるできことだなあ、とその時は思いましたが、あとで思うに、裕福そうな一家だったし、空港駅でのことでしたから、外国からの旅行者だった可能性の方が高かつたようです。

パリ市内まで四〇分。電車は、冷房なしです。窓が開いていて、風が入ります。暑いけれども、がまんできないほどではありません。冷房がない、というのが気に入りました。

## 宿につく

さて、宿は、パリ市内の中心街にありました。広大なリュクサンブルグ公園のまん前です。

娘が苦労して予約した宿は、とてもお安い宿でした。食事なしの素泊まりですが、一部屋七〇〇〇円なので、一人三五〇〇円。こんなにお安い宿は、日本でもなかなかないでしょう。

娘は「安い宿、さがすのに苦労してんよ」と言います。（ありがとうございます。）インターネットで日本にいながらにして予約できるとは、すごい。世界も近くなつたもの。

宿は、五階建てくらいの建物の二階部分のみ。その他階は、住居のようです。旧式の小さいエレベーターで、そこそこぼつて、一階のエレベーターのドアを開けると、そこはもう全部ホテルです。小さなホテルですが、私たちの部屋からは中庭が見降ろせ、ホールのベランダからは、表の通りが見おろせます。しづかな落ち着いた宿でした。

この宿に三泊しました。

そもそも、パリは、通りがすべて歴史的建造物です。それが、気持ちを落ち着かせます。けばけばしい広告がまったくない。よく店から聞こえてくるうるさい音楽もない。パリの中心街だというのに、とても静かです。車の音もまったくと言つていいほど聞こえません。

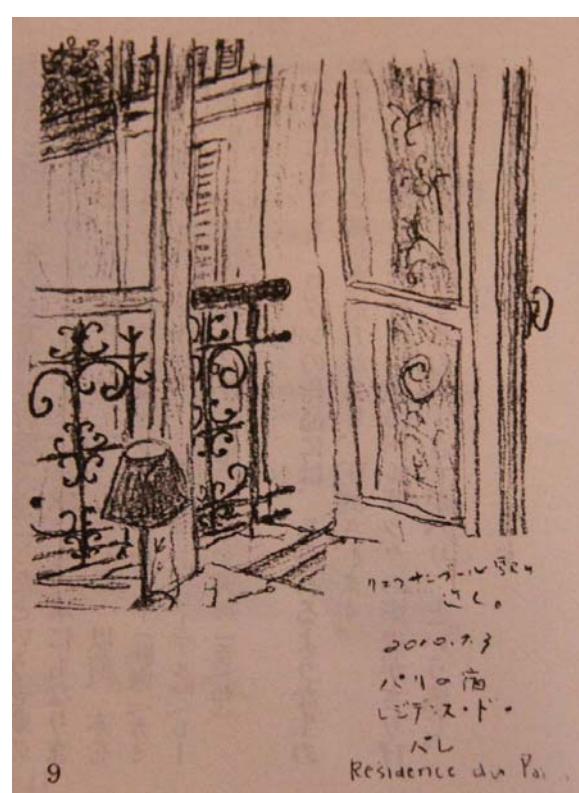
建物の外観は昔のままのすがたを維持するようなきまり

になつてゐるのでしよう。これはどういう由緒ある建物だらうと思うほどのりっぱな建物でも、ごくごくふつうの建物なのです。

ただし、それぞれの建物の内部は、近代化されています。私たちの部屋のすみにも、一メートル四方くらいの小さなシャワールームが置いてありました。トイレは共同で、ひとつだけ。部屋数の少ない小さなホテルです。



宿の食堂のベランダから表通りを見る。



### ロダン美術館

この小さなシャワールームでシャワーを浴びると、私はかなり疲れていましたが、元気な娘は寝不足も、ものともせず、さつそくその日のスケジュールを決行しようとします。

この日のメインは、ロダン美術館とオルセー美術館。どこに行くかも、ほぼすべて娘におまかせです。娘は例の図

書館の本を手に、道案内してくれます。

さつそく地下鉄に乗ってでかけました。以後の美術館めぐりは、みな、徒歩か、あるいは地下鉄でした。

まずはロダン美術館。

ロダンはとても好きで、期待して出かけました。

ですが、なんだか疲れ果てていて、ロダン美術館に着いたものの、見る元気なし。「おかあさん、寝とき」と娘も言ってくれて、美術館の隅の椅子に座つて、うとうと。でも、しばらく休んだあと、せつからだもの、とがんばつて、見て回りました。

ロダンは、十九世紀を代表する彫刻家で、「考える人」で有名ですが、東京の国立西洋美術館で、ロダンの「カレーの市民」の群像を見て、深い印象を覚えた記憶があります。「カレーの市民」は、十四世紀、イギリスとフランスの間で起きた百年戦争のころ、イングランドに包囲されたフランスのカレーで、飢餓のため降伏を余儀なくされたカレーの市民を救うため、指導的な位置にあった市民六人が、自ら志願して、処刑覚悟で、敵地に降伏交渉に赴いた史実をもとに製作されたものだそうです。

はだしで、首に処刑のためのロープをまかれ、城門の鍵

を手に出頭する六人の、勇気と、恐怖、苦悩の姿をロダンはとらえています。六人は、イングランド王妃の取りなしにより、命をすぐわれたそうですが。

ところで、ロダン美術館にカミーユ・クローデルの作品がたくさんあつたのに、驚きました。

カミーユ・クローデル（一八六四—一九四三）は、十九歳のときにロダンの弟子になつた女性だそつです。

ロダンは、カミーユ・クローデルの美貌と才能に惹かれて、彼女を愛人としたのですが、けつきよくは妻のもとに逃げ帰りました。そのショックで、カミーユは、精神のバランスを崩し、死ぬまで精神病院で過ごしたという悲劇の人でした。カミーユのことは、映画にも、本にもなりました。もうほとんど内容は覚えていませんが、以前、本を読んだ覚えがあります。映画は見ていません。（映画『カミーユ・クローデル』映画の原作は、『カミーユ・クローデル』（レーヌ＝マリー・パリス著 などいなだ他訳 みすず書房 1989年）

それにしても、ロダンの作品には、あふれるような生のエネルギーに満ちた迫力があり、圧倒されます。

パリの街の中に、ロダン作のバルザックの彫像がさりげなくおいてあつたりするのが、さすがパリ、という感じ。

バルザック像からも、強烈な生命のほとばしりのようなものが伝わってきて、さすがロダン、と思わせられました。そして、次の日に、膨大な彫刻作品が展示されているヴェルサイユ宮殿などにも行って思ったのは、ギリシャ以来、ヨーロッパには、彫刻の長い長い歴史があつて、その歴史の上にロダンの作品もあつたんだな、ということでした。



ロダン作 バルザック像



ロダン美術館 「カレーの市民」

ところで、ロダンの作品を見ていて、思い出さずにはいられなかつたのが、長野県穗高の荻原守衛（穂山・一八七九・明治十二年）一九〇一・明治三十四年のことでした。

穂山は、ロダンの「考える人」に衝撃を受け、渡仏してロダンに会つて、教えを受け、師と仰ぎますが、帰国後数年で、わずか三〇歳で急逝した作家です。高村光太郎とともに、日本の近代彫刻の歴史の草分けの一人となつた人です。

穂山の作品はすごいなあ、と見るたびに思つてきましたが、ロダンの諸作品を見ると、穂山がいかにもロダンの弟子であつたことが、実感されたことでした。（荻原守衛の作品は、安曇野市穂高の穂山美術館にあります。他府県の方に、いちばんのお勧め）

でも、ロダン美術館では作品が多すぎて、最後には、もう見るのも疲れてしましました。

ロダンだけでもろくに見なかつたのに、この日の予定は、ロダン美術館のほかに、オルセー美術館行きます。疲れてはいるものの、とにかく、娘とくつついていなければ、パリで迷子になつたらどうしようもありません。

また、地下鉄に乘ります。

二日目は、朝八時まで寝て、少し疲れがとれました。

オルセー美術館は、まだ新しい美術館で、もとは大きな駅だつたそうです。いかにも元は駅だつたような、とてつもなく天井の高い美術館に、著名な画家たちの絵がぎつしり。ゴッホ、ゴーギヤン、マネ、モネ、ロートレック、ゴヤ、ルノアール、ミレー、マチスなどなど…、すごい美術館です。

でも、私は疲れがとれなくて、またもや一人、椅子に座つて、うとうと。

あちこち見て回つていた娘が戻つてきて、「おかあさん、ミレーの『晩鐘』見た？」と聞くので、見ていないというと、じゃあ見に行こうと行つて、連れて行つてくれようとしたら、見物人を追い出しにかかっていた係の人たちが、もう閉館時間だからだめ、と言います。ちょっとねばりましたが、だめでした。残念ながら、ミレーの『晩鐘』は見ないままで終わりました。

パリは鷹揚<sup>おうよう</sup>

—— お乞食の多さにびっくり。

二日目の予定は、ヴエルサイユ宮殿行きです。地下鉄を乗り換えて、郊外行きの電車に乘ります。電車は二階建てです。

中一階の席に座り、しばらくすると、陽気なアコーディオンの音がしてきました。なんだろうな、と思つて、下を見ると、一階の入り口で、中年の男性がテンポのよい陽気な曲を、ブルーバル弾いています。

たのしいなあと思つていますと、五分くらい弾いたあと、男性は、アコーディオンを肩に、帽子を手に持つて座席の間を歩いてきました。小銭をもらいにきたのです。私たちがあげませんでしたが、あげた人もいたようでした。

フランスの鷹揚さを見たような気がしました。日本じゃあ、とてもじやないが、電車の中のアコーディオン弾きなど、禁止してしまうでしょうね。でも、いいじやないかなあ、と思つたことでした。電車は空いていましたし、なんだか、たのしかつたです。

パリに三日間いましたが、この鷹揚さは、パリのあちこちで見られるように思いました。

地下鉄の地下道で、美しいバイオリンの音が聞こえてきます。なんだろう、地下鉄でコンサートか、と思いきや、

なんと、ホームで男の人がバイオリンを弾いているのでした。

橋の上の黒人のおじさんのベースのライブも、街角での中年のおじさんたち五人のバンドも、小銭稼ぎ。前に帽子などがちょこんと置いてあります。

ベースのおじさんは、プロはだしでしたし、五人のバンドもとても上手でうまく、帽子に小銭がいっぱい入っていました。演奏者はみな中年で日本のような若者の街角演奏とは違つて腕はたしかで、趣味なのか、ちゃんと生活がかかつているのかは、よくわかりませんでした。



5人のおじさんバンド



陽気なベースのおじさん

ところで、パリっ子つて、陽気だなあと思いました。電車でもカフェでも、男性がよくしゃべっています。カフェやパンやさんで働いている男性も陽気。ベースのおじさん

も陽気でした。

でも、実際は、生活はいろいろと厳しいのかもしれません。お乞食の多さにびっくりしましたから。

もう十四、五年前になりますが、これもやはり娘に連れてつてもらつてタイに行つたとき、タイの首都バンコクでのお乞食の多さに驚いたものです。でも、パリでお乞食がこんなに多いとはねえ、と驚きました。

なにもしないでじつとお恵みをまつてているだけの人たちがいます。教会のそばでも、服装はきちんとしていますが、紙コップを手に、じつと立つてある中年の男性がいました。これらのお乞食は、ほとんど白人の男性でした。私が見たなかで、一人だけ黒人のお乞食がいました。その人は大柄なおじいさんでしたが、足が具合悪いのか、大通りの広い歩道の奥で、小さな、低い椅子に腰掛けています。頭に造花の冠をのせていて、お乞食でも陽気な感じでした。

そのおじいさんは、私がポケットをさぐつてあげた小銭を見て、首をふりました。やれやれ十円ぽつちか、と思つたのでしょうか。けつこう実入りがいいのかもしれません。せつかくですから、わたしも百円ぐらいはあげたかったのですが、けつきよく、日本に帰るまで、どの硬貨がいくらなのか、硬貨の値がわからずじまいだったのです。

日本だって、ホームレスの人もたくさんいますし、生活保護を拒否されて飢え死にする人もいるようですので、貧しい人がいないわけじゃない。でもお乞食の姿は見られません。お乞食が堂々とできるというのも、お乞食を許容する、一種の伝統的な文化か、鷹揚な風土があるからかもしれないなあ、と思つたりしたのです。

ところで、セーヌ川にかかる橋の上で、スケッチをしていましたら、私たちに近寄つてきて、娘に、「これを落としたんじゃないですか」と金属の指輪のようなもの見せた三十代くらいの黒人男性がいました。

「いいえ、落としちゃいませんよ」と娘は身振りで答え、そそくさとその場を立ち去ろうとします。私も娘のあとをついて立ち去りましたが、「あの人は、お金をくれ、というのよ」と娘が言います。そう言えば、そんな感じだつたなあと思いました。

お乞食だけでなく、小さな花束を売る女性たちもいましたのでしよう。けつこう実入りがいいのかもしれません。人たちは多いようと思われました。

やはりフランスもさまざまな問題を抱えた国なのでしょう。

## ヴエルサイユ宮殿

さて、ヴエルサイユ宮殿駅に着くと、急に大雨が降つてきました。

電車から降りた人は、傘を持つていない人が多いようです。駅の出口にたまっている人を目当てに、さっそく傘売りの若い黒人男性が現れました。でも、傘を買う人はほとんどいません。みなさん、なかなか財布のひもは固い。

私たちは、超ぼろ傘ですが、日本から軽い折りたたみ傘を持参してきていましたので、雨がやむのを待つ人達をしり目に、傘をして宮殿に向かいます。

宮殿までは、だだつ広い広場が広がっていて、けつこうな道のりです。宮殿に近づくと、雨の中を歩く人に向かって、傘がいるいかと聞く、傘売りの黒人男性たちがあちこちにいました。まだみなさん若者です。仲間同士で商売しているのでしょうか。でも、一日がんばっても、大した実入りにはならないのではないか。

さて、宮殿の見学をおえて帰るときには、雨はやんでいました。私が、娘に向かつて、「雨、止やんだら、あの人たちの商売あがつたりやなあ」と少々心配しましたら、何のことはない、たくましい黒人の青年たちは、今度は自分の三年、フランス革命中に刑死した王妃。

頭に小さな傘を乗つけて、(これは日除けと見た)、両手にどつきり各種のみやげものをもつて、帰途につく人に声をからして、売り歩いています。  
でも、私も買いませんが、やっぱりあまり売れないと心配します。この人たちは、失業してゐるんだろうなあ、と心配しました。

さて、ヴエルサイユ宮殿の内部は、言葉を失うほどの壯麗さでした。広壯な宮殿の内部は隅々まで金箔がはられてます。高い天井にも絵が描かれ、金のドアの取っ手にまで、装飾が施されています。

日本語の説明が聞こえるイヤホーンを借りて、部屋から部屋へ移動しながら見学します。たくさんの人なので、時には前が見えないことがあります。

マリーアントワネットが寝ていたというベッドのある部屋も見ました。アントワネットは、この部屋の隅に見えるドアから逃げたそうです。どつしりしたベッドカバーの布地にはきらびやかな刺繡がしてあります。でも、こんなに広い、豪華すぎる部屋で眠るのは、あまり寝心地がいいとは思えませんでした。(註・マリー・アントワネットは、一七九八年、フランス革命中に刑死した王妃。)

天井から吊り下された、数々の豪華なシャンデリアのある、広い広いホール。

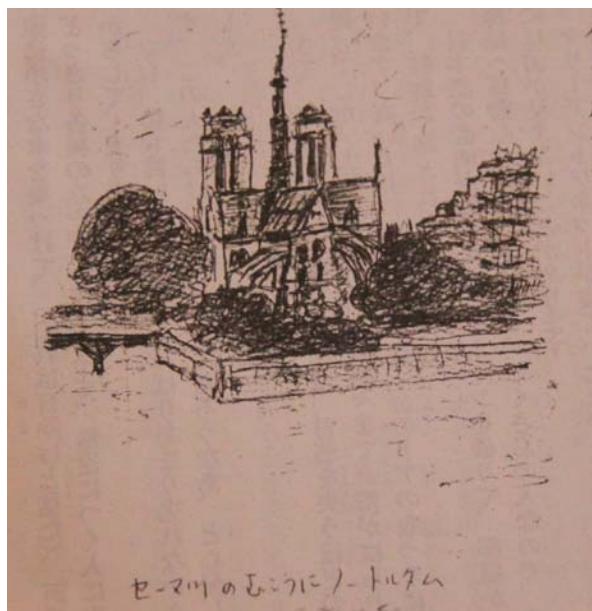
そして、宮殿の広間などに飾られた数え切れないほどたくさんの大きな彫刻、高い壁に飾られた無数の絵画…。描かれた絵に、ナポレオンが登場している作品がとても

多いのに気づきました。また、絵は、戦争を題材にしたものが多い。皇帝や貴族、そしてキリスト教に由来のある絵もとても多いようでした。

それらの巨大な絵が、広壯な宮殿の壁を埋め尽くしています。あまりにも作品が多いので、これにも疲れてしまいました。



ヴェルサイユ宮殿で



ノートルダム大聖堂



ノートルダム大聖堂のステンドグラス

告解こっかい、つまり牧師に罪を告白するための、古い、扉のついたごく小さな、箱のような部屋が、教会のホールの端にくつか並んでいたのにも眼を引かれました。その狭い空間の中で、牧師に自分の罪を懺悔することを思うと、なんだか息苦しいように感じられました。

ところで、パリの発展は、このノートルダム大聖堂ができたとおなじ十二世紀ころからだそうです。パリ盆地は、フランス唯一の穀物生産地であり、セーヌ川は、諸都市と直結する働きをもっていた、ですので、このころ、パリはヨーロッパの経済・政治・文化の中心であつたそう。

古い都だったのですね。

### パリもバーゲンの真っ最中

この日は、あとでノートルダム大聖堂にも行きました。だれでも入れますが、なかでは、ミサが開かれていて、男女二人の美しい讃美歌の歌声が、広いお堂の中に響いていました。

この、十二世紀に着工され、十三世紀に完成したという有名な教会は、とても大きな、高い高い天井のある壮大な教会です。教会の壁は、その高い天井まで、美しいステンドグラスで、飾られ尽くしていました。そのあまりの高さときらびやかさに、私などは、威圧感を覚えたほどです。

この日は、地下鉄にも乗りましたが、一日中、パリの街を歩き回ったような気がします。街では、バーゲン、バーゲンの真っ最中。娘によると、もうすぐヴァカンスなので、それまでに売りたいのだろう、ということでした。ヴァカンスになると、お店はお休みになるそうです。私たちは、

ヴァカンスの前に滞在したので、よかつたのです。

夏物衣料品や靴などのお店は、あつちでもこつちでも、もう必死の形相で？ 五〇%引きだよ

つ！と叫んでいるような広告が目立ちました。でも、広告、と言つても、

お店のショウウインドウに、描いてあるか、はつてある程度で、色とりど



### 鷹揚じやない改札口



ちょっと色の浅黒い六、七人くらいの中年の女性たちが、大きな買い物袋から、さだめしバーゲン品であろうTシャツなどを引っ張り出して、わいわいと、みなで買つてきた商品の品定めー。みなさん、大きな声で夢中でしゃべつていたのも、なんだか、まるで、大阪のおばさんたちのようで、おもしろかったです。

おフランスって、パリって、あんがい気取つてないのね、と思いました。けつこう雑然とした、人間臭い、おもしろい、鷹揚な街がありました。

ひるがえりの派手な旗が路上で翻っているわけではなく、騒がしい音楽が鳴つているわけでもないので、街並みの上品さが損なわれているわけではありませんけれどもー。

この大売出しの大宣伝のようすも、なんだか、大阪と似通つていて、面白いなあ、と思つたことでした。

この日の帰り道、地下鉄のホームで電車を待つていて、イスラム風のベールをかぶり、すその長い衣装を着た、

地下鉄に乗るのも、わりあい慣れてきました。でも、パリの地下鉄の改札口だけは、どうにもいただけませんでした。

切符は、どこまで行つても同じ値段。日本円で二百円ぐらいいです。（すばらしい！）ですので、切符売り場はあまり必要ないため、自動販売機がおいてあります。でも、この切符の自動販売機がやたらわかりにくくて不親切。娘だけでなく、パリの人達でも、なんだか苦労している人がい

ました。旅行者かもしだれませんが・（もちろん、私は娘にす  
べてお任せですから、徹頭徹尾、らくちんな傍観者！）

### フランス人は、みなとも親切…

さて、問題の改札口です。

自動改札の出口には両開きの、幅は狭いが胸の高さくら  
いもある頑丈な扉があつて、人が通らないときはいつも扉  
がしまっています。切符を投入口に入れると、やおら左右  
に扉が開きます。でも、すぐガチャーンと閉まってしまうの  
です。

地下鉄の駅で、私が、手引きのキャリヤー（手押し車）  
を後ろ手に引っ張つて改札口を通過うとしたら、ガチャン  
と扉が閉まってしまつて、キャリヤーが扉にはさまれてしま  
いました。扉は、強烈な力で、私のキャリヤーを締めつ  
けているではありませんか。いくら引っ張つてもびくとも  
しないのです。

うんすかやつていたところ、しばらくして、あとから改  
札口に来た人が切符を入れて、扉が開いたので、荷物は無  
事に改札口を通り抜けることができました。なあんだ、そ  
ういうときは、改札口に入つてくる人を待てばいいんだ、  
と気づきはしましたが、でも、あの勢いで人間をはさんで  
しまう、ということにならないのかしら？  
鷹揚とは程遠い、おつかない改札口でした。

さて、地下鉄の自動改札口で、私たち東洋人が一人して、  
改札口の扉でうんうん言つているのを見たらしい、あるフ  
ランスの四〇代くらいの男性が、なにやらフランス語で私  
たちに話しかけてきました。どこへやら私たちを連れてい  
こうとします。荷物を無事に改札口から抜け出させた私た  
ちが、なんやろう、と思ってついていくと、その方は、私  
たちが改札口を出ようとしたのに出られなかつたと思つた  
らしく、別の改札口に連れて行つてくれようとしたのでし  
た。

娘が、英語で、「いや、ちがうんです。私たちは、改札を  
入ろうとして、荷物が引っ掛かつただけなんです」という  
ようなことを言つた（のではないかとおもいます。）ら、そ  
の方は、なあんだ、そなんだ、わかつた、といった表情  
で、立ち去つていかれました。親切だなあ、と思つたこと  
です。

また、別の地下鉄の駅で、娘が例の手引書を見て乗り  
換えがわからず、そこらにいたお嬢さんに、ちょっと英語  
で訊ねましたら、なんとその娘さんは、自分が乗ろうとし  
ていた電車を遅らせて、案内板のところまで私たちを連れ

て行つて、説明してくれたのでした。なんて親切なんだあ、と思つたことでした。

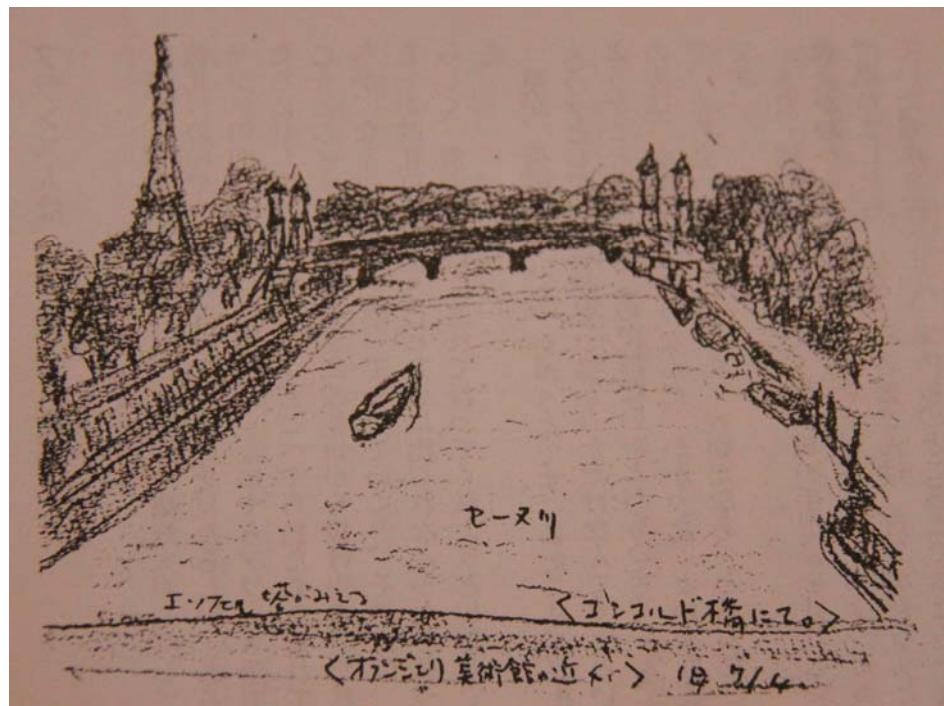
また、パリのサン・ミッシェル通りで、例のごとく大通りの歩道の半分ほどを占拠しているカフェでお茶を飲んでいらしたお年寄りの男性に、娘がちよつと道を聞きましたら、丁寧に教えてくれて、そのあと、そのカフェの前の信号のところで、信号待ちをしていたら、その方が、わざわざ、カフェから私たちのところにやつてきて、さらに丁寧に教えてくれるではありませんか。

まあ、なんて親切！とまたもや思つたことでした。

さて、この日は、夕方、娘が、お目当ての「自然食」のレストランで食べさせてくれました。レストランの中に入つたのは、この日だけでしたね。でも、「自然食」なのでお肉もワインもなしです。

長いテーブルに、グループごとに三々五々座つて、食事です。私たち二人の前に座つた、四〇代と見える小太りの男性が、私たちに話しかけました。英語だったので、少しは話がわかりました。

まあ、おしゃべりなこと。日本のこと話をしていたようです。ほんとうにフランスの男性つて、おしゃべり！



この日の夕方、セーヌ川の橋の上で、スケッチをしました。広い川の両側とも、歴史的な建物ばかり。涼しい風に吹かれて、美しい眺めをみるのは、気持ちのいいものです。

ときおり、川を大きな観光船が、たくさんの観光客を乗せてやってきます。橋をくぐるとき、手を振りますと、向こうでも手を振ってくれます。セーヌ川にかかるいろんな橋を渡りましたが、そのつど、この遊覧船を見ました。この遊覧船にいちど乗りたかったなあ、と思いました。

## 横道 よこみち — 授業料も無料

ちょっと横道にはいますが、一。

鷹揚と言えば、ヨーロッパの多くの国で、授業料は、無料だとも聞いています。フランスも、公立学校なら、大学まで無料だそうですね！

また、フランスでは、大学入学は、資格試験だけ。日本のような苛烈な受験競争はない。でも入学するのはかんたんでも、進級は難しいらしいです。日本とまるで逆ですね。日本では、お受験競争が激しくて、大学に入ると、もう勉強しないでいい、というシステムですが、それじゃあ、そもそも、勉強って、いったい何のためにするのでしょうか。

受験勉強の無意味さと弊害が身にしみている私としては、こんなシステムは改めるべき、と思うこと、しきりです。  
へいがい

## 横道 よこみち ② — ヴァカンス

ついでの話、その二は、ヴァカンス（長期休暇）のこと。フランスでは、労働時間は週三十五時間と決められています。残業すると、超過勤務手当が二十五%から五十%も支払われるそうです。それに、なんと、だれでも年間五週間の有給休暇が保障され、それも連続してとれるそう。

ああ、だから、フランス人は人生を楽しんでいる感じがあるんだな、と思ったことです。うらやましいですね。

とはいって、フランスも、かつては、長い間、海外に植民地をもち、植民地からの富や労働力の収奪によって、自國の人々が豊かにくらしていた面があります。ヴァカンスの伝統も、そんな収奪の上になりたつものだったのかもしれません、などとも思います。

十九世紀半ばからさかんになつたという、パリのカフェも、コーヒー、紅茶が、植民地から入るようになつてからのことらしいのです。

### 横道 よこみち ③ — ベトナム戦争

さらに横道にそれますが、冒頭に紹介しましたティク・ナット・ハン師の母国ベトナムも、一八八七年から一九五四年までの半世紀以上、フランスの植民地でした。

第二次大戦中にフランスにとつてかわって、ベトナムを植民地支配しようとしたのが、日本。

一九四四年秋から一九四五年春にかけて、ベトナム一帯を凶作が襲つたそうで、この時に日本軍とフランス総督府が食糧を奪つたため、二〇〇万人に及ぶベトナム人が餓死したという事実も、忘れてはならないでしょう。

けれども、日本の支配は、数年でご破算。戦後日本にかわつて、またまたフランスがベトナムを植民地支配しようとしたが、それまでほしいままに<sup>取</sup>奪<sup>ゆめ</sup>されていたアジア・アフリカなどの人々は、もやは、宗主国（植民地を支配する国家）の言いなりにはなりませんでした。（ベトナムでもフランスに対する抵抗運動がおこります。果敢な戦いのうち、ベトナム人がフランスを破つたのが、一九五四年。ところが、そのあと、アメリカがベトナムに侵略してきて、ベトナム戦争となります。ベトナム戦争がやつと終わつたのが、一九七五年。

フランスがベトナムを植民地支配したのは、もともとは、ナポレオン三世<sup>せんきょうし</sup>が、ベトナムにいたフランス宣教師団の保護を名目に遠征軍を派遣した一八五八年に始まるそうです。

そうすると、ベトナム人は、一〇〇年以上もの間、ずっと外国の支配をうけるか、または戦争をしかけられるか、の連続だったわけです。したがつて、一九二六年生まれのティク・ナット・ハン師の生涯は、そのような過酷な試練との闘いであり、ハン師が、おだやかな微笑の奥にきびしいものをひそめていられるのも、当然なわけなのでした。

つい先ごろ、松本で、「ウインター・ソルジャー（冬の兵士）ベトナム帰還兵の告白」という映画と、「ハーツ・アンド・マインド ベトナム戦争の真実」という、二本のドキュメンタリー映画を見ました。どちらも、アメリカ人の良心の証となる映画です。

映画は、ベトナム戦争が、いかに残虐なものであつたか、ということ。また、それだけでなく、残虐な加害者になつたことが、アメリカの若い兵士たちにとつても、癒すことができない深い傷となつたことを、アメリカの兵士自身が直接語った記録でした。

ベトナム戦争終結前の、一九七二年と七四年に製作されたこれらの映画を見ると、最近のイラク・アフガニスタン侵略戦争でも、ベトナム戦争と同じ状況であつたであろうと、考えさせられました。（戦争中の日本軍も同じでした。）

映画は、戦争という極限状況では、どの国の、どのようないい人間でも、きわめて残酷になつてしまふ可能性があるということ。けれども、残酷行為に手を染めてしまふと、残酷行為をおこなつた者自身にとっても、結局は深い傷になつてしまふことを教えてくれました。

私たちは、戦争に駆りたてるものを、注意深く退け、  
戦争を拒否しないといけないんだなあ、とつくづく思いました。戦争とは、要するに、殺し合いなのですから。  
そして、その危険は、今、現在も世界中に存在するのですから。

ハン先生の願いも、世界に平和をもたらすことにあります。そのことについては、またされます。

ハン揚でないフランス

鷹揚なフランス、と書いたのですが、までよ、そとも限らないなあ、といろいろ考えました。

わりあい最近、フランスで、若者の暴動が報じられたのを記憶しています。イスラム系の移民の若者の失業率が高いということを聞きます。

パリ市内を数日観光してあるきましたが、貧しい移民の人たちの多く住む居住区があるそうです。やはり気楽な観光客には、ほんとうのところは、わからないものなのでしよう。

移民問題は、もともとフランスが十六世紀から二十世紀

にわたって、一大植民地帝国であった時代の問題を引きずつているようです。

私の記憶にあつたフランスの植民地は、ベトナムとアフリカ北部のアルジェリアです。

フランスは、アフリカに、アルジェリアだけでなく、広大な植民地を持つていました。

アフリカでは、現代のモーリタニア、セネガル、ギニア、マリ、コートジボワール、チャド、中央アフリカ共和国、コンゴ共和国、マダガスカル、ジブチなどを植民地として持っていたというから、驚きます。

第一次大戦には、約五十五万人の植民地兵がフランス戦線に動員されたと言います。また、戦争中、人手不足とな

つたフランス国内に二十万の労働者を送るなどしたとのこと。

日本に朝鮮人が多数住んでいるのも、日本が一九一〇年の朝鮮併合以来三五年の間、朝鮮を植民地にしたことによる因がありますが、フランスの場合は、もつと長期間、そして、大規模に植民地の人々を収奪していたわけでした。もつとも、フランスだけではありませんでしたがし。

さて、フランスの主要な植民地であったアルジェリアの民衆は、百五十年もの長いフランスの支配のくびきを脱しようと、第二次大戦後に独立戦争（一九五四～一九六二年）を起こします。この戦争をめぐっては、フランス国内の世論も割れて、あわや内戦になりかけたといいます。

第二次大戦中、フランスをナチに対する勝利に導いたとされるド・ゴール将軍は、第二次大戦後、アルジエリア戦争をめぐっても、フランス国内の世論が二分する中、アルジエリアの独立を認め、戦争を終結させるのに、大きな力を果たしたということです。

このアルジエリアの独立戦争については、私が中学生か高校生のころのこと。だからなんとなく記憶にあるのでしよう。

この長い間の植民地支配の歴史の結果、フランスには、植民地からの移民が多数存在することになったのでしょうかし、植民地支配がおわってからも、フランスは、低賃金労働者としてですが、移民を多数受け入れてきました。

でも、フランスの議会で、イスラム教徒の女性が顔や体をおおうブルカなどの着用を事实上禁じる法案を賛成多数で可決し成立した、という最近のニュースは、どうなのでしょう。

また、「ごく最近のニュースでは、フランス政府が、「不法に滞在している」ロマ（ジプシー）の人たちのキャンプを撤去し、元の国に強制送還しようとしていることを知りました。それは、人種によつて差別することにつながる危険な政策だと、まわりの国からも批判が出ているようです。

強制送還に反対するデモの様子が新聞に載っていましたが、パリ市内を、アコーディオンとともに、陽気にデモをする様子は、なにやら日本の悲壮な雰囲気とちがう、デモ慣れ？ というか、デモが市民権を得ていること、市民の抵抗の歴史の古さを感じさせて、おもしろく思いました。

もう少し長くパリにいれば、私たちが歩いた街をデモ隊がくりだした様子を、この目でみることができたのでした。



強制送還されるロマの  
家族 →

ロマ強制送還に反対す  
るデモ。パリ。  
10、9、4 全国で 10 万  
人が抗議デモ。 ↓



インターネットのニュース から

でした。  
ところで、当時のフランスの、ヴィシーにあつたナチスに協力的なフランス政府—いわゆるドイツの傀儡政権（あやつられた政権）は、積極的にユダヤ人狩りもおこなったそうです。

フランス警察を主力とする独仏両国の警察は、寝込みを襲つて、ユダヤ人を有無を言わせず検束し、ドイツ東部に点在する絶滅収容所に送つた、というから、おそろしい。パリに住んでいたユダヤ人のうち、「およそ四万三千人ほどが強制収容所に送られ、うち四万人は二度と生きてパリに戻つてくることはなかつた。」そうです。（「ナチ占領下のパリ」長谷川公昭著 草思社 一九八六年）

この「ナチ占領下のパリ」という本は、実におもしろく、またおそろしい本でした。ドイツに占領されていた四年間のあいだに、實にさまざまな人間模様が展開されたようですが、まざまざと描きだされていて、息をのみました。ナチ

ところで、ド・ゴール將軍と言えば、フランスをナチから解放した英雄として、有名です。

第二次大戦の緒戦で、フランスはナチスドイツの電撃的な攻撃にさらされ、敗北し、ナチの支配下のもとにおかれます。以後、パリは、四年間もナチスに支配されていたの

ナチ支配下のパリ

ナチ支配を主力とする独仏両国の警察は、寝込みを襲つて、ユダヤ人を有無を言わせず検束し、ドイツ東部に点在する絶滅収容所に送つた、というから、おそろしい。パリに住んでいたユダヤ人のうち、「およそ四万三千人ほどが強制収容所に送られ、うち四万人は二度と生きてパリに戻つてくることはなかつた。」そうです。（「ナチ占領下のパリ」長谷川公昭著 草思社 一九八六年）

この「ナチ占領下のパリ」という本は、実におもしろく、またおそろしい本でした。ドイツに占領されていた四年間のあいだに、實にさまざまな人間模様が展開されたようですが、まざまざと描きだされていて、息をのみました。ナチ

第二次大戦の緒戦で、フランスはナチスドイツの電撃的な攻撃にさらされ、敗北し、ナチの支配下のもとにおかれます。以後、パリは、四年間もナチスに支配されていたの

の愛人になつていた…。（映画「ココ・シャネル」2008年アメリカ・イタリア・フランス合作）

元共産党員や社会党員であつたという人が、ナチにとらえられて、残虐きわまりない拷問の末、転向し、今度はナチの手先となつて多数の抵抗運動の仲間を売つた者がいた。一方、言語に絶する拷問にも口を割らず、息絶えた抵抗運動家ももちろんいたし、フランス警察官の中にも、占領軍の意に逆らつて、強制収容所に送られた人もいた。ドイツ軍のなかにも、ナチに抵抗する人もいた。などなど…。（ただし、パリ解放とともに、対独協力者たちは、法廷で裁かれることがあります。ルノー自動車のルイ・ルノーは、法廷に立たされる前に獄死。ルノー自動車は、対独協力のかどで、戦後国営化されたそうです。）

一方、共産党を中心とするフランス国内の反ナチの抵抗運動（レジスタンス）も、しだいに激しさをましていく。抵抗運動に参加したのは、公式発表で四十万人。そのうち十万人が命を落としたとのことです。

ナチと手を結んだフランス傀儡政権を批判して、イギリスに亡命して、本土フランスに抵抗を呼びかけ続けたのが、ド・ゴール将軍でした。

ド・ゴール将軍は、連合国の一員として、蜂起したレジスタンスとも協力し、飢えに苦しむパリの解放、フランスの勝利へとみちびきます。そのためでしょうか、パリの空港の名は、シャルル・ド・ゴール空港であり、パリ市役所の正面に、ド・ゴールの肖像画の巨大な壁画のようなものがあつて、びっくりしました。

けれども、ド・ゴールは、抵抗運動の主力であつた共産党を、決して認めようとしなかつたそうで、歴史の内幕は、単純じやないようです。



パリ市役所の前の広場で遊ぶ子供達。  
おもしろい遊び道具が置いてある。



パリ市役所の正面にド・ゴールの肖像

それにもしても、人というのは、国によって一つくりりにはできないもんなんだなあと、つくづく考えさせられました。

このおもしろい本によると、フランスで積極的に抵抗運動に参加した人は、五%、ナチにすり寄ったのが五%、八割の人が、ナチをこころよく思わないけれども、消極的抵抗しかしなかった…、というのは、いつの時代、どこの国でも、そういうのでしょうか。

じゃあ、自分ならどうするだろう、と考えてみても、実際そのような極限状況にならなければ、自分がどう動くか、ちょっとわかりません。

またまた横道ですが、映画「ローマの休日」などで有名な可憐な女優、オードリー・ヘップバーンも、ナチ支配下で、抵抗運動に参加していたといいます。

オードリーはイギリス人でしたが、第二次世界大戦中はオランダに住み、ナチのオランダ占領に対する抵抗運動の資金集めのために奔走するなど、反ドイツのレジスタンス運動に従事していたそうです。

オードリーの叔父と母親の従兄弟はドイツに対する抵抗者だったため、オードリーの目の前で銃殺され、彼女の異

父兄弟もドイツの強制収容所に入れられたとのこと。あの可憐な笑顔の裏に、そんな過酷な体験があつたとは…。

## 核保有国フランス

鷹揚でないフランスについて、もうひとつ、言わなければならないのは、フランスが、アメリカ・ロシアほどではないにしても、核大国であることです。

フランスが一九六〇年にアルジェリアのサハラ砂漠で核実験を始めたとき、世界の世論は大きな衝撃を受けました。そのことは記憶にあります。ちょうど私が二十歳のときです。（長生きの証！）

その後一九九六年までに、サハラ砂漠と仏領ポリネシアで計二二〇回もの核実験を行つたとのことです。

（なんで、よその国で実験するネン！）

かのド・ゴール将軍は、核兵器の開発を強力に推進したそうです。かつての大國意識がまだまだフランスには残っていると言えるのかもしれません。

日本は、憲法によつて、戦争をしない国として、世界から尊敬をかちとつきましたが、戦争をしてはいけない、

という日本の憲法が世界中の憲法になる以外に、人類の生き延びる道はない、というのが私の考えですが、フランスは、そうではない。

フランスも、この点、鷹揚でないのです。

（あまりの横道にいきすぎ！）

### おフランス史 あれこれ

ところで、フランスに出発する前から、フランスのことを探らなくつちゃと思つて、まずは、家にあつた小さなフランス文学史（「フランス文学案内」渡辺一夫・鈴木力衛著 岩波文庫）を読み、ノートをとりました。

さアすが、おフランス！ 近・現代の世界文学史に名の残る作家が、わらわらといます。

若い時にはいろいろ読みはしましたが、かの有名な、スタンダールの「赤と黒」と、フローベルの「ボヴアリー夫人」を読んでいませんでした。純情な若いころだったもので、「愛欲もの」だと思って、敬遠しちゃつたのです。でも、おフランスに行くんだもの、これくらい読んでお

かなくつちや、と思って、寝物語に読んでみましたが、これがめっぽうおもしろい。寝るのを惜しんで読みました。

「赤と黒」など、ただの「愛欲もの」ではなくて、むしろ「純愛もの」でしたし、フランスの一八〇〇年代前半の時代のようす、特に貴族と庶民の生活や感情のちがいがよくわかつて、実におもしろかったです。

フランス革命が短時日で破たんして、そのあとナポレオンが出てきて、ナポレオンも失脚して、亡命していた貴族たちがフランスにもどつてきて、王党派、貴族が復権していったころの話でした。

「ボヴアリー夫人」は、男性には許されても、女性には許されなかつた、愛欲に走る生き方に身を任せ、結局は破滅した女性の物語ですが、当時の女性たちのおかれた状況がわかつておもしろかったです。これを男の作家が書いた、というのが、やはりすごいなあと思いました。

つづけて岩波新書の「フランス史」（「フランス史十講」柴田三千雄著）を読みかけたので、フランスに持つていき、でも、フランスでも読み終わらず、日本にもどつてから続きを読みだして、二度目はノートをとりながら、だいぶたつて、やつとのことで読み終えました。

フランスに行ったので、身近に感じられて、とてもおもしろかったです。複雑な歴史を簡略に書かねばならないためでしようが、少し難しかったですが、一字一句をゆるがせにしてないので、よく読めばよくわかる、という立派な著書でした。

ただ、新書版では無理な注文なのでしょうが、文学や哲学、美術と時代のかかわりが、ほとんど書かれていないこと、歴史の移り変わりのもとになる、時代の底の動きのようなものがあり見えてこないのが、残念でした。

それにもしても、フランスは、島国日本とはなんと歴史がちがうことでしょう。フランス史といつても、ヨーロッパ地域全体の歴史と重なる部分が多いので、今度は『ヨーロッパ史』を読みたいもんだ、と思つたりしています。

## フランス史の印象—— いくつか

フランス史を読んで、印象に残つたことを書いてみます。

諸民族が入り乱れていた

そもそも、ヨーロッパは地続きの大陸だけあって、たえ

ず、諸民族が入り乱れ、争いをくりかえしてきた地域だった。そのうえ、ヨーロッパの外からも、たとえば、北からはノルマン人（ゲルマンの一種ですが）、東からはアジア系の民族の侵入、南からはイスラム系民族の侵入なども絶えなかつたようです。

なので、そもそもフランスという国のおこりも、それほど明瞭ではないということ。

五世紀後半に、フランク族のフランク王国という国がつた、フランク族というのも、ゲルマン民族から枝分かれしてできた一族だったようですが、八世紀ごろに、カール大帝という人がてきて、毎年のように遠征をくり返し、カール大帝という人がでてきて、毎年のように遠征をくり返し、息子三人に国が分割された。長男は真ん中を、次男は東部を、三男は西部を、という具合。こうして、イタリア、ドイツ、フランス、の原型がうまれた、その後、一〇世紀後半になって、戦争の結果、フランスとドイツの分離がほぼ決定的になる、といった経過です。

けつぎよく、フランスは、フランク（元はゲルマン）、ケルト、ローマの三民族の要素が数世紀の間に融合したもの、ということです。

そうすると、言つてみれば、ヨーロッパ中、元をただせ

ば、みんな親戚！と言えることになりましょう。

おもしろいと思ったのは、民族が入り乱れているので、王位を継承するため、その正当化の装置が必要だったということです。

その装置として、カール大帝の父王のピピンの時に、キリスト教の儀式（塗油）を採用して、王権が神の意志にもとづくものであるとしました。王権の確立のために、宗教が利用された、ということで、なるほど、と非常に面白く思われたことでした。

戦争つづきだった

こうして、地続きのヨーロッパ地域には、ほんとうに、たえずたえず戦争があつた、ヴエルサイユ美術館に戦争の絵が多いのも、実際に、歴史というと、戦争の歴史、と言つていいくらいだからなのでしょう。

例をあげれば、十四世紀の半ばから十五世紀の半ばにかけて、イギリスとフランスの間で「百年」も戦争がつづきました。

これは、王位継承権をめぐる戦争です。

だいたいが、イギリス王朝とフランス王朝も姻戚関係でつながっている。ですから、戦争と言つても、国と国の争い、というより、王家と王家の勢力争い、と言つたほうがいいようなのです。

この「百年戦争」のときの、イギリスとフランスの王家のつながりの系図が「フランス史」に載っていますが、ちよつと読んだくらいでは、わけがわからない。

とにかく、ある国の王が死んで、ちよつと「たごたがう」といふと、少しでも血のつながりがある者どうしが、国を超えて、王位をつぐ権利を主張して、戦争するわけです。まあ、そのころは、「國を超えて」という意識もあまりなかつたようですね。「國」がはつきりしないのですから。

とにかく、百年戦争の結果、イングランド王国も、大陸支配の夢をあきらめて島国になります。

そもそも、十四、十五世紀は、ききんの大発生やペストの大流行があつた。フランスでは、ペストのために、一世紀半の間に、住民の三〇～五〇%の命が失われたというから、すごいものです。その上に、間隔はあつたそうですが、百年も戦争が続いたのでした。

さらに、百年戦争による荒廃からやつと立ち直った十五世紀の末、当時のフランス王シャルル八世が、イタリア支配の夢にとりつかれて、イタリアと戦争。

そのあと、こんどは、ドイツ・神聖ローマ帝国の皇帝カール五世が、西欧キリスト教世界の盟主となる野望を抱いて、フランス、イギリス、イタリアに戦争をしかけて、この戦争が一五九五年まで、六十年もつづく、といった具合。結局フランスも神聖ローマ帝国も、ともに、財政的に力尽きて、ヨーロッパ大帝国を築く夢は挫折することになつたそうですが。

日本の十五・十六世紀は、国内での「戦国時代」です。でも、日本では、戦国時代のあとは、鎖国して、国内の平和が保たれました。

十五、十六世紀以後、ヨーロッパ諸国は、植民地を求めて、アジア・アフリカ・アメリカ大陸に進出していきます。日本の鎖国も、ヨーロッパ諸国の海外侵略に対する防波堤でもあつたのでした。

国境という考えが生まれたのは十八世紀

ところで、「国境」という観念が生まれたのは、十七世紀から十八世紀にかけて、フランスでは、太陽王ルイ十四世（在位一六四三—一七一五）の治下、フランスがヨーロッパ第一の強国であつたころ、だということです。そのころはじめて、王のもとに住民全体が関わりをもつようになつたのでした。

（日本の場合も、ほんとうに日本という国家意識が生まれたのは明治以後のことで、それも、国外からの圧力に对抗するために、国民として一つに統治する必要から、明治新政権が、「國家」「国民」意識を力づくで国民に叩き込んだためだったようですし。それまでは、「お国」と言えば、『信濃の国』などの、地方のことだったのですものね。）

さて、かのヴエルサイユ宮殿も、このルイ十四世のときに、四〇年かけて、ヨーロッパ最大の宮殿にしあげられたものだそうですが、たいへんな難工事で、数万人の人夫が動員され、多数が死亡。巨額の費用を費やしたこと。王自身がこの宮殿に住んでいて、王宮は、王の権威を内

外に誇示する一大装置であったとのことです。この宮殿で、

二、三百人の朝の引見、五〇人の就寝前の引見がおこなわれたりしたとか。

ヴエルサイユ宮殿の贊を尽くした壯麗さを目の当たりにすると、なるほど、この宮殿が、王の権威を内外に誇示し、するためのものであつたことがよく納得できました。

けれども、大陸最強の陸軍を誇ったルイ十四世は、在位中に、オランダやスペインに、四つの征服戦争をおこなつた、でも、戦争続きで、戦費は莫大となり、フランスの財政は破たん。民衆も重税のために困窮したことです。それは、やがて、十八世紀末のフランス革命（一七八九年）にもつながっていく構図であろうことも、感じさせるものでした。

### 「鉄仮面」

ちょっと横道

図書館で「仮面の男」（一九九八年 アメリカ）という映画のビデオがあったので、借りて見ました。仮面の男とは、いわゆる「鉄仮面」のことです。ルイ十四世が主人公の映画

なのです。

子どものころ、「鉄仮面」やら、「がんぐつ王」（アレクサンドル・デュマ作「モンテ・クリスト伯」）やら、夢中になつて読んだものでしたー。

この映画では、ルイ十四世が実は双子で、弟の方は、鉄タニヤンと三銃士たちは、現王の目に余る暴虐ぶりに怒つて、牢にいるやさしい弟と王を入れ替える、こうして入れ替えられた弟のルイ十四世は、すばらしい王となつた、という筋書きです。

### 「三銃士」もデュマ作。

映画としては、なかなかおもしろかったものの、ほんまかいな…と、思い出ましたが、実際に、鉄仮面ではないが、布のマスクをさせられている男がバステイユ監獄に閉じ込められていて、その男は、ルイ十四世の異母兄ウスタシユ・ドジエであつた、という説が、現在主流とされているとか。まあ、あり得る、おもしろい話でした。悲しいかな、血で血を洗う、壮絶な政権争いはどこの国にもある…。

で、戦火が長く止んでいた、という時代はなかつたのでした。

### 戦争ばかりの歴史の中から…

フランス史を読んでみると、そのあまりの戦争つづきに、心がつかれます。

そして、日本が江戸時代、二六〇年もの間平和が続いたのは、世界史的にみると、一種の奇跡のようなものだったと言えるのか、と思つたりしたのでした。

そしてフランス史を読んでいて、ふうん、なるほど、とわかることは、どの国の王たちも、がんがん戦争を起こすのですが、結局、戦費の浪費から、財政的にたちゆかなくなり、その国の勢力が衰えていったことです。あるいは、国土が荒廃し、戦費の増大のための重税がのしかかり、民衆のみならず、貴族やブルジョワなどの不満も高まって、政治不安がうまれ、いわゆる今でいう、政権交代が起きたりしたことです。

なんだか、現在の世界情勢も同じだなあ、と思つたことでした。

第二次大戦後、世界一の強国意識で、戦争につぐ戦争を

や

重ねてきたアメリカが、今や財政的に破綻はたんしかかつていて、国としての衰えが眼に見えるようになつてきていることと、重なつてみえてきます。

一方、ヨーロッパが、第二次大戦を経て、ついにEU／歐州連合・ヨーロッパ共同体をつくったのも、つくづく戦争に疲れた歴史があつたから、とも言えるのかも知れないと思いました。

それにしても、今回の旅で私たちが滞在したベトナム人のお坊様の村が、フランスで受け入れられていることにたいして、フランスは、鷹揚せいけいだなあという印象を持ちました。

そして、フランスの人たちが、私たち東洋人の親子ふたりづれに対しても、とても鷹揚で親切だったのは、そもそもフランスという国の起こりも、その歴史も、いろんな民族の集まりであつたり、いろんな民族との関わりであつた

(長々と書きましたが、これが言いたかった!)

## パリの三日目

フランスに行く前に、娘から「おかあさん、どこに行きたい？」と聞かれてはおりました。オペラ行きたい？と聞かれて、行きたい、行きたい、と言つていたのですが、あいにく、チケットがそれなかつたそうで、断念。オペラ座は、素晴らしい建物らしいので、残念でした。日本でオペラに行こうと思えば、非常にお高くて手が出ない。パリで見られたら、まあことばは分からなくとも、チャンスと思つたのでしたが。

でもまあ、パリはいくらでも見るもの、行くべきところがあつて、時間はいくらあつても足りません。

さあ、三日目のパリです。

この日は、ルーヴル博物館に行きました。

## パリの地下鉄

パリでは、もつぱら地下鉄か歩きでした。よく歩き、よく地下鉄に乗りました。

地上では、カフェがあり、いろんなお店があり、にぎわう人どおりがあります。通りの両側は、すべて美しい歴史

的な建造物だし、多少ゴミが落ちていたり、お乞食がいたりしても、やはり「パリ」という感じです。

ところが、一歩地下鉄に乗ると、突然のように、黒人の人たちがたくさんいるのに、気がつきます。およそ二割か三割の乗客が黒人なのです。

地上の通りでは、外国の観光客も多いからかも知れませんが、黒人はあまり多くありません。

地下鉄に乗っているのは、観光客ではなく、働いているパリ市民のようです。地上では、陽気なフランス人、といった雰囲気でしたが、黒人の乗車客の多い地下鉄は静かで、にぎやかな話し声がほとんど聞こえないのが、不思議でした。どういうことかな、と思いました。

また、もうひとつ思つたのは、黒人が多いわりに、男性でも、女性でも、白人と黒人がいつしょにつれだつて歩いていたり、地下鉄に乗つていたりする姿を、あまり眼にしなかつたことです。

移民大国のフランスですが、フランス人と移民、白人と黒人の間に、スムーズな関係がいまだ結ばれていないのかもしれませんと思いました。通りすがりの印象でしかないのですが、なんだかなかな時代は進まないんだなあ、と思つたことでした。

美術館は、第一日曜日は、だれでも無料

ルーヴル美術館は、すごい人出でした。

人が多いはずです。フランスでは、外国人でも、だれでも、美術館はすべて、第一日曜日はただなのです。

十八歳以下は、第一日曜日以外でも、いつでも無料だとか。これもフランスの鷹揚さでしょう。文化の維持に日本とほけたちがいにお金をかけているのです。



パリの地下鉄

さて、かのルーヴル博物館です。

混むらしいからと、早めに出かけました。パリにもすこし慣れできました。

電車をおりると、改札口は、すぐルーヴルの入り口につづいています。開館前の朝九時前に着いたのに、はやくも長い列ができています。でも、ほぼ一番乗りでした。

この美術館こそ、由緒ある宮殿だったところで、世界でも最大級の所蔵を誇る美術館です。古代ギリシアの彫刻から「モナ・リザ」などの近代美術品まで、無数のコレクションがあります。

この日は第一日曜日とあって、それこそ無数のコレクションに負けない人ばかり。一日に、一万人から二万人もの人が見学にくるそうです。

入館料がただの上、受けつけに十カ国位の言語のパンフレもおいてあって、それもただです。なんと太っ腹。これでなくちやあね、と思ったことです。

日本の文化予算は、ことのほか少ないといいます。貧乏な人でもいい美術品を見たり、いい音楽が聴けるように、国が文化的な行事にもっとお金を出すようになつたらいいのに、と強く思ったことでした。

(またまた横道：、鷹揚と言えば、パリの人も、大阪の

人といつしょで、けつこう赤信号を無視します。松本では、赤信号を無視する人は、あまりいませんが、私は、もと大阪人なので、車が来ないと、赤信号でも渡っちゃいます。

だって、車より人が大事！という感覚です。なんや、パリって、大阪とおんなじやんか！などと思ったものです。でも、同じなのは、その点だけ…。今の大坂の知事さんは、文化には鷹揚じやない方のようです。去年の暮れに、万博の大坂府立国際児童図書館が閉鎖されたと聞いて、びっくりしたものでした。）

さて、ルーヴルは、たくさんの人出ですが、とても広いので、けつこうゆつたり見ることができます。ギリシア・ローマ時代の、もつとも初期の素朴な彫刻の展示室などは、とてもすいていました。私は、これら素朴な彫刻群に惹かれました。

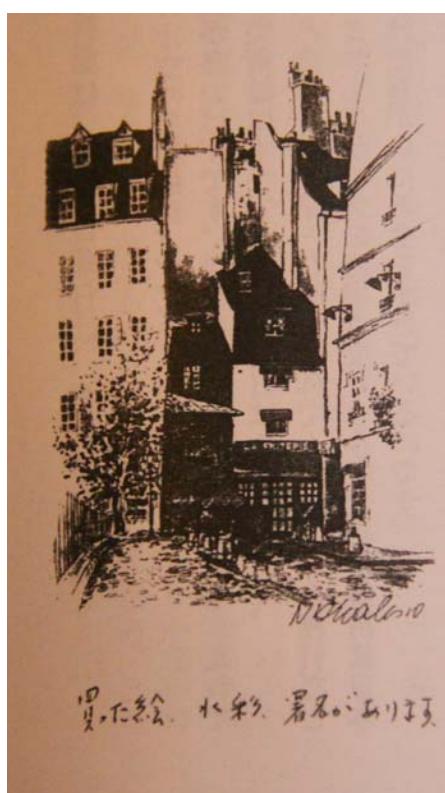
三時間半ぐらいかけて、見ましたが、あとで、娘と「あんまり一度にたくさん見たら、どこで何をみたか、わからなくなっちゃうね」などと話しました。

帰りは、まずは、歩きです。この三日間、なんどもセーヌ川を見ました。ルーヴルを出て、セーヌ川のカイゼル橋

を渡りおえたところに、六〇代くらいのおじさんが、小さな画用紙に自分で描いた水彩画を、たくさんそこいらに立てかけて、売っていました。

とても上手だったので一枚買いました。一枚十ユーロ。一ユーロが百十四円でしたので、千円ちょっとになります。この方の絵をたくさん買い込んでいた人もいました。（その絵は、我が家ではただ今トイレ・ギャラリーにはってあります。）

そのおじさんは、なんだか、貧しそうな、元気のないお年寄りでしたので、なんとなく、買ってしまったのです。お安かつたですし。かつては、有名な画家をめざして、パリに来た人かもしれない、なんてことをちらつと思いました。



橋を渡つて、さらに歩いて、サンジェルマン大通りにやつてきました。大通りに本屋さんがありましたので、中で日仏辞典がないか搜しました。店員さんに片言の英語で聞きます。仏英辞典しかなかつたので、それを買いました。

フランスは、自分の国語に誇りを持つていて、英語なんかは使わないので、英語は通じない、と聞いていました。いまさらおフランス語でもないので、じゃあ「ボディラングイジ」（＝あたつて くだけろ 言葉？）でやろう、と思って辞書は何も持つてきませんでした。でも、やつぱりかんたんなフランス語くらいは知つておくと便利かも、と思つたのでした。

さらに歩いて、チュイリユリー公園の隅の木陰で一休みしました。公園の向こうにルーブル宮殿が見えます。私が疲れて木陰のベンチに座つている間に、元気な娘は、近くのオランジエリー美術館へ。私が休んでいる木陰から美術館は見えます。この美術館も百メートルくらいの長蛇の列。私は疲れて、見る元気なしです。

娘は、戻ってきて、モネの「睡蓮」がとてもよかつた、と言つていました。私もやはり見たかったなあと思いましたが、歳には勝てませんでした。なにしろ七十歳のおばあ

さんですものね！

さて、そこから歩いて、シャンゼリゼ通りへ。「おお、シャンゼリーゼ」というシャンソンで有名な通りです。

その近くのセーヌ川にかかるコンコルド橋を渡つて、サンジェルマン大通りのカフェでピザを食べました。



## 公衆トイレがない

パリで困ったのは、駅にトイレがないことです。地上には、たまに有料トイレがありますが、観光の街のわりに、トイレが少ない。トイレに行きたいと思うと、そこいらじゅうにあるカフェに入るしかありません。

フランス滞在中、いちどもフランス料理をいただき、ワインも飲まないですませました。相当な貧乏旅行です。

トイレ目的のカフェで、ピザをたべたのがぜいたくな部類です。

でも、パンがとてもおいしく、特にクロワッサンは、どこのパンやさんでもとてもおいしい。それに超・超・超・大きい。日本のクロワッサンの一・二・三倍位もある感じです。

大きなフランスパンを買って、脇にかかえて歩いている人を見かけました。なんにも包んでいなくて、はだかのままのパンです。なんだかたのしい風景でした。

パン屋さんのほかにケーキ屋さんもいろいろありました。それはたくさんの種類のおいしそうなケーキが陳列ケースにずらり。でも、ケーキもいちどもいただきませんでした！

（おかあさん、食べへんかつたって、いばつてるの？と娘に言われそう。）

ところで、フランスに限らないかもしませんが、太った人がとても多いように思われました。まあ、私などの太さなどまだかわいいほうで、それはびっくりするほどのお腹まわりの女性や男性が眼につきました。

クロワッサンでも、あんなにおいしくて、あんなに大きいですから、推して知るべし、食べる量が、日本人とはケタがちがうのでしょうか。

さて、この日、地下鉄に乗って、やつと夕方に、宿のあるリュクサンブル公園までたどりつきました。この日はとてもよく歩きました。

もう午後の六時もすぎようというのに、公園はまだ大賑わい。パリは白夜に近く、夜の十時頃にならないと暗くなりません。

宿の近くのアイスクリーム屋さんは、列を作つて大繁盛。みなさん、歩きながらアイスクリームをなめていきます。

私も娘に、「ねえねえ、アイスクリーム、買ってよ」とおねだり。（親娘逆転！）

パリでは、道案内もすべて娘お任せで、娘とはぐれないように、一生懸命ついて歩きましたし、お金も娘が持つて

います。私は、もしされた場合のために、宿の名前と電話番号を書いた紙をもっています。（親娘逆転！ その2）娘が許してくれたので、ちょっと並んでアイスクリームを買いましたが、ミルクの国とて、クリームは本物で、とてもおいしかったので、満足しました。

リュクサンブル公園の一角に、子どもの遊具のある広場があり、ここでも、親子連れで大にぎわい。メリーゴウラウンドにのって、楽しそうにしている子どもたちをしばらく眺めて過ごしました。

この日は、一日中とてもよく歩きました。

## カフェだらけのパリと。パリの車

パリは、古い歴史を感じさせる街です。世界中から多くの観光客が集まります。前にも書きましたように、昔のままの外観をとどめようと努力している街でした。

ですので、いわゆる駐車スペースはありません。みな路上駐車です。よく見ると、路上駐車は違反ではなく、道路を駐車場にする以外にはないわけで、道路は、れつきとした駐車場になつています。とても小さな、一人乗りのかわいい車が道路端にぎつしり留っていました。



二人乗りのかわいい車



サン・ジェルマン通りのカフェ  
で。パリッ子気分

基本的には、車ではなく、みな歩いています。だからカフェもはやるわけです。歩道の三分の一から半分ほどまで、カフェが張り出しています。車の行きかう大通りでも、平気でみな道路上のカフェでビールやお茶を飲んだり、軽食を食べたりしています。

ところが、車が行きかうわりに、排気ガスの臭いがしないのです。どうやら、ガソリンが、臭くないよう。娘によると、この国の石油は、良質の北海油田だからということでした。

夕方も遅くまで、飲んだり、食べたり、しゃべったり…。

フランス人は、とにかく、楽しそうだなあ、という印象の三日間でした。

## ボルドーへ

パリについて四日めの七月五日。

いよいよ、目的地のボルドーへ出発です。朝六時前に宿を出ました。とことこ歩いて、モンパルナス駅へ。ここから、フランスご自慢の新幹線にのるのです。さすが大きな駅です。娘が、日本で、あらかじめ予約してくれています。新幹線は、なかなかきれいな車両でした。

ところで、パリでは、地下鉄も郊外電車も宿も、みなクーラーなしでした。フランスに発つ前に、娘が「おかあさん、パリって三六度もあるんやで」と言うので、着るものを見夏用のものにしてきたのですが、地下鉄も宿も、べつにクーラーなしでも、過ごせました。湿気が少ないからかもしれません。が、新幹線だけは冷房がきいています。新幹線のクーラーが利きすぎて、ちょっと寒かったので、女性の車掌さんにその旨言いますと、すぐクーラーをゆるめてくれました。

車掌さんは、美人で、制服もおしゃれな臘脂色。<sup>えんじいろ</sup>さすが



パリです。娘によると、新幹線の運転手も、地下鉄の運転手もみな女性だったそうです。私は、それには気がつきませんでした。見ないで惜しいことをしました。

さて、ボルドー地方は、フランスのかなり南西部の農村地帯です。葡萄酒が有名です。目的地に着くまでに一度乗り換えました。景色がだんだん田園地帯になっています。列車のなかで、市場で買った大きなきゅうりやトマトや、駅の売店で買ったクロワッサンなどで、超喫約式お弁当。おいしかったです。駅の売店のパンでも、フランスのパンは、さすが、とてもおいしい。

途中の乗り換え駅で、一緒にプラットフォームに降りた一家を、おじいさんらしい人が迎えに来ていました。五歳ぐらいの女の子が、おじいさんのところまで走っていました。おじいさんに抱かれていきました。おじいさんもとてもうれしそうに孫娘を抱いていました。まあ、日本のお盆の帰郷風景と同じだなあ、と思いました。

午前十一時半ごろ、目的地の駅に到着しました。そこには、滞在予定の仏教共同体・プラム・ヴィレッジの、日本人の尼僧さん。シスター・チャイさんが、車で迎えにきて

くされることになつています。

しばらく待つて、車が到着。チャイさんのほかに、アメリカ人の女性が乗っていました。六十代か、私とおなじ歳くらいの、笑顔のとても美しい、知的な雰囲気のある人でした。その方も、きょう着いたばかり、ということでした。

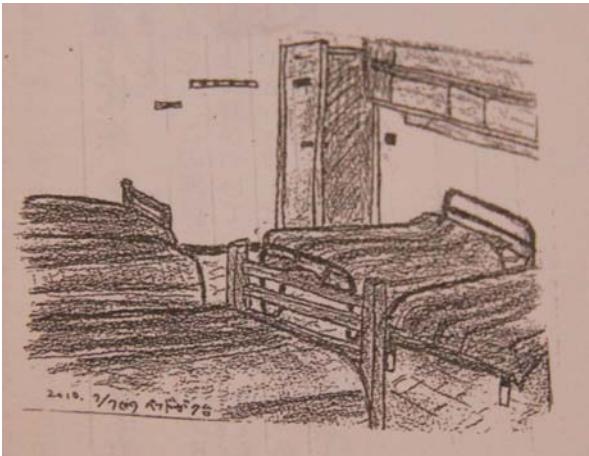
あとで、分かつたことですが、この女性、アニーさんは、アメリカ人で、このプラム・ヴィレッジに一年間も滞在予定の方だったのです。私たち一人が九日間滞在するうちに、親しくなり、誕生日のお祝いまでいたきました。

英語が片言しか話せないので、いろいろお話をうかがえなかつたのが残念です。アニーさんに限らず、けつこう親しくなつた人達がいたのに、あまり話せなかつたのがとても残念で、英語ができればなあ、とつくづく思つたことでした。

さて、あたたかい笑顔とともに、シスターたちに迎えられて、部屋に落ち着きました。滞在費が安いだけあって、この部屋はかんたんなベッドが七台と、ベッドの頭上に棚がついているだけの、とても簡素な部屋です。トイレとシャワーは共同で、建物の一角にあります。初日は、他の人がまだ到着しないので、娘と二人だけでした。



2010.7/6(火) プラムビレッジの中庭 部屋の前



きな桑の木やプラムの木が、あちらこちらで、広い木陰をつくっています。その下に長いテーブルと椅子がいくつもおかれています。そこで食事をとることができます。

その大木の枝に、長い綱のついたブランコがかかってたり、また芝生の上に卓球台があつて、子どもたちが群れて、一緒に遊んだりしています。

私は見ませんでしたが、子どもたちがサッカーをして遊んでいたようで、そんな広い芝生の場所もあるのです。

私たち親子が滞在したこのハムレット（宿坊）は、男性のお坊様・ブラザーはいなくて、尼僧さん・シスターだけ。小さい子ども連れの家族も幾組か滞在しているので、父親も少しいますし、日本人の参加者はすくなくて、日本人グループは、ひとつしかありませんので、日本人の男性も、この宿坊に滞在していますが、男性の数が少ない宿坊です。

さて、プラム・ヴィレッジは、四つの宿坊に分かれています、私たちが滞在する宿坊・ハムレットのほかに、アップバー・ハムレット（上の宿坊）とロウワー・ハムレット（下の宿坊）などがあります。

いくつかの宿坊は、それぞれ、かなり広い敷地のなかにありました。

私たちの泊ったハムレット・宿坊も、芝生の広い敷地に、事務室、宿舎、食堂のある建物、売店のある建物、大きなホール、鐘つき堂、睡蓮の池、などが点在しています。大

二日後に、一週間のリトリート・つまり瞑想合宿のようなものが始まるので、その参加者が到着すると、このハムレットだけで、二〇〇人近くの人が居住することになるということでした。私たち親娘も、そのリトリート・瞑想合宿に参加するため来たのです。

以前断食道場に行つたことはあり、その断食道場は、禅

宗のお坊様の主宰する道場だったので、断食中、瞑想の時間がたびたびありましたが、どうも私は瞑想は苦手で、瞑想の時間、常に妄想にとらわれておりました！ どんな暮らしがこのフランスの田舎があるのでしょう。いささかの興味をいだいて、そこで生活を始めました。

ナット・ハン師は別のハムレットにいるので、ここでは、主にベトナム人のシスターたちが、滞在者の世話や、瞑想や法話の手伝いをしたりしていました。シスターの数は、このハムレットだけで、四〇人くらいもいたでしょうか。ある程度お年を召したシスターもいましたが、ほとんどが二十代と見える、とても若いシスターたちでした。また、ほとんどのシスターがベトナム人です。日本人のシスターは、私たちを車で迎えにきてくださったチャイさんは、尼僧としての名前です。「チャイ」という名前は、尼僧としての名前です。

チャイさんは、三四歳になる、まだ若いシスターでした。ヨーロッパで、バイオリニストとして、主に室内楽で演奏活動をしていらっしゃる方です。このプラム・ヴィレッジで尼僧として剃髪するまでは、カナダでお母さんといつしょにくらしていたそうですが、お母さんも二年前に亡くなられ、バイオリニストとしても「もういいかな」と思われたそう

です。

かといって、バイオリンを手放したのではなく、チエロを弾けるお坊様・ブラザーといつしょに、このビレッジで、ときおり、ちょっとしたコンサートをすることもあるとのことです。

そんな機会があるなら、ぜひ聞きたいと、娘とふたりチャイさんに言つたことでした。私たちのその希望は、滞在中に実現することになります。

## 一日目 — 食事は完全菜食

翌日は、朝八時から朝食です。

食事は、バイキング方式です。食堂に、料理が並べてあって、尼僧さんたちも滞在者も、お皿や箸、フォークなどを手に、列を作つて順番を待ちます。

食事は完全な菜食です。ミルクも卵もありません。主食はパンやごはん、コーンフレークなどです。コーンフレークにかけるのは、牛乳のかわりのお米のミルクです。さいしょは、こわごわでしたが、だんだんこのライスマilkに慣れ、美味しいと感じるようになりました。はちみつや各種のジャム、果物が置かれています。朝の食事はかん

たんですが、お昼、夜の食事は、野菜をいためたものなど、主にベトナム料理のようでしたが、なかなかおいしいものでした。

お皿に自分の食べる分を載せると、あとは、食堂のホールでも、敷地内の木陰のテーブルでも、どこで食べてもいいのです。私は外で食べるのが好きで、ほとんど外でいただけました。

私たちの宿舎では、翌々日からはじまるリトリート・瞑想合宿に大勢の参加者が到着する予定のため、その受け入れ準備にシスターたちはいさきか忙しそうでした。私と娘



も、車で運ばれてきた大量の食糧の運搬を手伝つたりしました。建物のながだけでなく、敷地内のテントで滞在する人達もたくさんいます。娘も、到着予定の人達のため、たくさんのテントをセットするの大わらわなシスターの手伝いをしていました。

忙しそうではありました、シスターたちも滞在者も、みなさん、笑みをたやすく、ゆったりと仕事をしています。

昼食前の十一時半から十二時まで、シスターたちといつしょに、十二、三人で、僧坊につづく、外のゆるやかな坂道を散歩をしました。この散歩は歩く瞑想（ウォーキング・メディテイション）と言って、無言でとてもしづかに歩くというものです。

ブドウ畑やプラムの畑の間を静かに歩いて、小高くなつたところで、しばらく沈黙のまま休憩。ボルドー地方の美しい田園風景にひととき眼を休めます。

僧坊に戻つて、十二時半から食事。

三時半から四時半まで、大きなホールで座禅して瞑想。六時食事、という日程でした。その間に洗濯したりしました。もちろん、手洗いです。

さて、ちょうど午後の一時ごろが日本では午後八時ごろ

です。ちょっと日本の自宅に電話したら、夫はいっぱい飲んでご機嫌で、「なんとかやつております」などと言つていましたが、仕事が忙しい上に、犬や猫の世話まであつたので、なかなか大変だったことでしょう。

フランスは、この季節、夜暗くなるのが遅いので、この日は、夜の七時半から九時ごろまで、近くの村の丘の上の古い教会まで、若い滞在者の方といつしょに散歩しました。眺めのいいところだから行つたらどうか、とチヤイさんに勧められたのです。

いつしょに散歩したのは、韓国人の三四歳の女性と、ベトナム人でアメリカ在住の一歳の女性、二八歳のイギリス人のロンドンから来た女性、そしてわが娘の、あわせて五人。この外国の三人の女性たちは、しばらく前から滞在していたとみえ、とても仲がよさそうでした。

さて、もう夜の時間だと言うのに、まだまだ明るいなか

を、ゆっくり五人で丘に登つてゆきました。

聞くと、韓国の女性は翌日に帰国するらしく、三人の間では、お別れも兼ねているようで、たくさん写真を撮りあつしていました。

丘の上に登りつめると、すこし民家があつて、丘のはずれに相当古い、小さな教会がありました。教会は、扉が閉まっていて、ひつそりした感じでした。村人の姿もまったく見えませんでした。

教会の壁につづく、腰までくらいの高さの石造りの塀の向こうに、とてもすばらしい眺めがひろがつっていました。そこから、この地方一帯の田園風景が見下ろせるのです。ほぼ平坦な大地に、きれいに区画された緑や黄色の畠。高い山がないので、眼のとどくかぎり、畑がつづいています。ところどころに小さな林。散在する家々。おだやかな美しい眺めでした。

今回の旅のためにはじめて買った小さなスケッチブックを持ってきていましたので、さつそくざつとスケッチしました。

(表紙の絵です。)

九日間の滞在中に、このときいつしょに散歩したベトナム人のジーナさんとなかよくなりました。

あとでわかつたことですが、ジーナさんは、ベトナム人ですが、アメリカのロスアンジェルスに両親ときょうだいと一緒に住んでいて、カレッジの社会学の先生をしている

そうでした。ですので、英語とベトナム語とを堪能に話せます。夏休みでここに来たとのこと。一ヶ月くらいも滞在するようで、シスターたちといつしょによく働いていました。とても若く見えるので、最初は、まだ学生さんかなと思ったくらいでした。

### 三日目—— 数十カ国の人たち 集まる

さて、到着三日目は、なにも日程がない日で、私たちの部屋にも、リトリートの参加者がつぎつぎに到着しました。日本人のN子さんとフランス人、アメリカ人、イギリス人の女性たち四人です。N子さんは、まだ二八歳、東京で業界誌の編集をしていたという、とてもユニークな、おもしろい女性でした。欧米の女性たちは、みな中年、合わせて六人が同室ということになりました。

この日の昼食には巻きずしが出たりしてびっくりしました。そう言えばパリにもお寿司屋さんがありました。うわさ通り、寿司がヨーロッパでもけつこうはやっていたのですね。まあ、日本のお寿司とは、味が違い、やっぱり本場の寿司にはかなわないなあ、と思いましたが。

敷地内にだんだん人が増えてきました。圧倒的に白人が多いのですが、どこの国の人だか、まったくわかりません。チャイさんに、いつたい何カ国位の人が来るのか聞いてみましたら、数十カ国という返事で、驚きました。たしかに、同じテーブルで食事をしている人に、どこからいらしたのか、お国を聞いてみると、みな違つたりするのです。（これくらいは英語で聞けます。）

欧米人は、国が違つても英語は話せる人が多いようで、その人たちの間では、英語で会話が通じているようでした。でも、こちらにはほとんどわかりません。昔、学校では英語の成績はよかつたのになあ、と残念に思いました。

夕方、食堂で食事中に、とてもかわいい赤ちゃんをつれたお母さんと知り合いました。笑顔のとても美しい若いお母さんは、ポーランドの方でした。生後半年くらいの赤ちゃんの名前はローザちゃん。生まれた時、あまりにもかわいかったので、ローザ（バラの花）と名づけたということでした。きげんのよいローザちゃんは、ちょっとあやすと、ゲタゲタ笑います。宿舎の人気者になりました。

つていても、さすがに暑かったです。

ハン先生は、ベトナム語は当然ですが、英語、フランス語も自由に話せるそうです。



ローザちゃんとおかあさん

この日は、英語での法話。数十カ国の人々が集まる、ということですが、同時通訳の機械が十カ国語分あって、それぞれの言葉の機械のまわりに、それぞれの国の人々が集まつて、イヤホーンで、同時通訳された話を聞きます。

#### 四日目——リトリート・瞑想合宿はじまる

到着四日目の七月八日から、瞑想合宿・リトリートが始まりました。リトリートに入ると、スケジュールがびっしりになります。

それまでのスケジュールに、いよいよティク・ナット・ハン師の法話を聞くために、ほかのハムレット・宿舎からもたくさんひとがきて、その数合計七、八百人に

なりました。広い瞑想ホールも超満員です。

乾燥しているので、気温が高くても、あまり暑く感じないのですが、人がぎっしり集まつたホールは、窓を開け放

日本人の参加者は、私たちも含めて、女性三人に、男性が二人。日本語の同時通訳者はチャイさんです。とても優秀な通訳ぶりでしたが、イヤホーンから聞こえる音声が、やはり少し聞き取りにくいこともあって、お話は半分以下しか分からずじまいでした。

欧米の人々が、ベトナムのお坊様の話をこんなに熱心に聞くすぐたを不思議な思いで見ていました。すでに仏教に関心を持っている人たちがここに集まっているのでしょうか。こんなにいろんな国の人々が集まっている、せっかくの機会に、みなさんの思いや考え方を知りたいと思いましたが、やはり言葉の壁で、<sup>せんき</sup>纖細な胸の内を聞くことはできないのが、とても残念に思われました。

ハン先生の法話を聞きながら、ハン先生を描きました。

そして、ハン先生の言葉を少し書きとめました。断片的な

ので、あまりよくはわかりませんがー。

「私たちのなかには、いろんなタネがあります。

怒りのタネがあります。  
潜在意識と言います。

死のタネ、差別のタネもあります。

許す、喜ぶ、悟るタネ、  
気づきのタネもあります。

怒り、悲しみ、絶望に包まれると、  
もうタネではありません。

それは業です。

呼吸して、怒りに気づきます。

怒りを抱くことで、怒りを手放すことができます。  
苦しみに気づくことが大事です。

手放すこと。

手放せば手放すほど幸せになります。  
国家も手放すことが大切です。



息を吸って、吐いて、

何も考えない、息だけです。

呼吸に集中するのみです。



体と心がちぐはぐで一致していない。  
緊張しています。

ほぐすことがたいせつです。

心とからだを一致させる喜びー  
呼吸をたのしむだけでよいのです。

生きていることはすばらしいことです。

奇跡です。

奇跡の中の最大の奇跡、  
それは生きているということです。」

法話のあとは、昼食の時間まで、ハン先生のあとについて、参加者全員で「歩く瞑想」をしました。プラムの木立の間のゆるやかな坂や、林の中の小道を、黙つて、ゆっくり、ゆっくり歩いていきます。

この「歩く瞑想」で歩いた場所は、宿坊の隣に住んでいた

る方のブドウ畑の傍らでしたが、そこには、あきらかに除草剤がまいてあると思われる、人工的な枯れ草のまっすぐな道ができていて、このような、大地にまかれた毒物の上を、心安らかには歩けないなあ、と内心考えていました。

それにもしても、数百人もの人が、誰一人一言も話さず黙々と歩く姿には、なにかなじめないものがあり、個性を主張することの強いと聞く欧米の人達の従順さに、不思議な思いを持ちました。

昼食の後、自由時間もありますが、三時からは、自分達の泊る部屋の掃除、四時からは、グループごとに、食事の準備やあとかたづけなど、いろんな仕事の役割分担があります。

私たち日本人を中心とする十人ほどのグループは、広い敷地の散水の仕事になつていきましたので、グループ内で担当する場所を決めて、おこないました。私たちのグループは、毎日のお茶のテーブルを整える仕事もありました。お茶は、コーヒー、紅茶、ベトナム茶など、さまざまあります。いつでも飲めるようになっています。



この日、夕食の後、グループの中での話し合いの時間がありました。

七時から九時ごろまで、小さな竹林のそばのテントの下で、まるく椅子に腰かけて、話し合いの時間を過ごしました。もう夜の時間帯でしたが、まだ外は、明るくて、九時をすぎて、やつとうす暗くなつてくるのです。

話し合いは、シスターが三人ほど助言者として参加します。私たちのグループは、日本から来た五人のほかに、イタリア在住の、六〇歳前後の、日本人男性とその奥さんのイタリア人、以前日本語教師として日本に滞在したことのある若いアメリカ人女性、そして、三人の子どもを連れて参加している、いさきか無口な西洋人？の女性でした。

この西洋人の女性は、とても無口な方だったので、同じグループだったのに、どこの国の方だったのか、わからずじまいでした。また、この方は、なんだかうつ屈したものがあるような感じの方で、朝やお昼の食事の時も、高校生

と、中学生くらいの娘さん一人と末っ子らしい小学生くらいの男の子が、ときどきお母さんのそばにやつてきますが、子どもたちが近寄ってきても、堅い表情で、いつしょに食事をせず、一人で食事していられました。なにか考え方とがあつて、一人でいたいのかなあと思いました。ただ、こ

の方も、一週間の瞑想合宿の終わりごろになつて、やつと笑顔を見せるようになり、子どもたちとも話したりしていられたので、ほつとしたものです。

チャイさんに聞いたところでは、欧米の人達も、なにか思い屈したものを持いて、この瞑想合宿に来るようだ、とのことでした。現代社会に生きるストレスは、どこの国でも同じなのかなあ、と思つたことです。

この夜の話し合いでは、日本人の若者、関西出身のO君が、「ぼくは人とのコミュニケーションが下手で、なやんでいる」という主旨のことを話したのが、心に残りました。

あとで、O君に聞いたところでは、仕事についていたが、どうも仕事が遅かつたりして、まわりの人とペースがあわないでの仕事をやめたとかで、今は、働いていないとのことでした。

このO君は、リトリートの最後の方では、ずいぶん元気になつて、だれでも自分らしく生きればいいんだ、と考える強さを持つようになつたようすが目に見えて、よかつたなあ、と思ったことでした。なにかO君らしい人生の目標もできたようで、とても生き生きしていました。そもそも、はるかこんな遠いところに、一人で参加して、自分の弱さ

をさらすというのは、もともと強い人であることのしるしでもあります。けつきよく、O君は、そんなしつかりした強い自分を見出しができたのだ、と思われました。

私は、この話し合いのとき、日本の中部地方の山の中に住んでいて…などということを話しました。あとで、娘に「お母さんの話、長すぎるよ」なんて、文句を言われました。

この話し合いも、私たちが日本語でしゃべると、チャイさんが日本語が分からぬ人に英語で通訳します。ベトナム語しかわからないシスターがいると、英語ができるシスターが、さらに英語をベトナム語に通訳します。といった具合で、少々時間がかかる話し合いでした。でも、なかなかいい時間でした。

### 五日目 — アッパー・ハムレット（上の宿坊）へ

ボルドー滞在の五日目。この日は、主にお坊様たちが寝泊まりしている上の宿坊・アッパー・ハムレットに、大型バス二台で参加しました。この日のナット・ハン師の法話が、アッパー・ハムレットで行われることになっていたからです。ハン先生の法話は、日によって、宿坊をかえて行



われました。

バスで約三〇分。途中、ボルドー地方の田園地帯をたつぱり眺めながらのバス小旅行でした。

一帯は、ブドウ畑、プラム畑、とうもろこし畑、小麦畑、ひまわり畑、そしてあとひとつは牛の放牧場と、全部で六種類の畑にきちんと区画されています。ふつうの野菜畑などは、まったく眼にしませんでした。区画された、色とりどりの畑が、ずっとつづきます。

九日間の滞在中に、ひまわりの黄色い色ががどんどんひろがっていくのに気がつきました。ひまわりの花が日に日に咲き広がっていくのです。帰るころには、すっかり真っ黄色の畑になっていました。

畑の合間に、ところどころ小さな林も残されていました。少し小高くなる斜面には、雑然とした林もあるにはありました。でも、高い山がまったくない風景です。

この田園風景は、美しくもありますが、山に住み、山を見慣れた目には、物足りなくもありました。あまりにも、きちんと区画されているのが、つまらなくもありました。利用されていない空間はあまりないのでしょう。平坦な土地は、すっかり人間に支配されてしまうのでしょうか。ここも、おそらく、その昔は、一面、深い深い森だったことでしょう。

アッパー・ハムレットは、とても広い敷地を持ち、お坊様・ブラザーもたくさんいました。シスターはベトナムの若い女性が多かつたのですが、ブラザーの中には、フランス人やアメリカ人もいました。

この日は、子どもたちがとてもたくさんいるのに気がつきました。少しだけ、黒人の子どももいて、みんないつしょに遊んでいました。

子どもたちも国籍はさまざまで、言葉も通じないでしようと、なかよく遊んでいました。遊びで心が通じるのでしようか。木にのぼったりして、非常に活発に遊びまわっているのが、見ていて気持ちよかったです。

### 微笑みを生きる

ハン先生の著書の一つに「微笑みを生きる 気づきの瞑想と実践」という本がありますが、わずか十日足らずの滞在中、もつとも快かったのは、どこの国の人も、眼が合えば、微笑んでくれることでした。私も、他の方と眼が合えば、微笑みます。相手も必ず無視しないで微笑んでくれるというのは、たいへん心が安らぐことなんだなあ、と思い



いろんな国の子ども達



ました。

この僧坊で過ごした間、非常にたくさんの人さまがさまざまな国の人たちの間にいて、まったく違和感なく、心安らかに過ごせたのも、参加者の微笑みにあるように思われました。だれも、おたがいに、この人、どこの国の、なもの？ という眼で見ないのです。

国籍を問わず、年齢を問わず、社会的な地位も、貧富の差も、なにも隔たりがなく、微笑みを交わしあう、だれもがお互いに人として認め合って、安らかに過ごせる場というのがそこに実在するというのがとても不思議でした。このような場に今まで居合わせたことはありません。

たしかに、このラム・ヴィレッジに滞在した日々は、実に平和な、ある意味で、天国のような日々ではあります。同室の若い日本人のN子さんは、リトリート最後の日に、滞在費はかかりますが、滞在を延長することを決めました。

このような安らかな世界が実在する、といつても、紛争の絶えない世界の中には、とても特殊な場ではあります。

この「特殊」を特殊でなくす、普遍にする、というのが、戦争の苦悩を自ら生き抜いてきたハン師の目的なのでしょ

うか。その目的のために、世界中をまわつてこられたようですが、その目的は、実現するのでしょうか。

私自身は、この僧坊に長いようとは思いませんでした。厳しいけれど、「現実」は、この僧坊の外にあるようと思われたからです。

さて、この五日目の夜は、指導的なシスター・チャン・コンさんの法話もありました。ハン師の法話もシスターの法話も、人と人の間の葛藤を、いかに解くか、というお話をほとんどだつたように思います。現代人が、人間同士の葛藤にとてもくるしみ、そして、その葛藤の解決を強く求めている、そういう認識がハン師たちにあるのだろう、と思われました。

さて、葛藤の最も大きなものは、「怒り」です。

怒りを感じたら、まず深い呼吸による瞑想をする、すれば、その怒りを冷静に観察することができる、冷静に観察すれば、その怒りを解く道が見出せる、そんなお話をだつたと思います。私自身にも、さまざま怒り、葛藤があります。それを、瞑想で解くのは、難しい…。ハン先生の教えを実践するのは、容易ではありません。

というお考えのようでした。では、どうしたら、だれもが心の平和を築くことができるのでしょう。

でも、この天国に住むシスターたちは、ほんとうに微笑みを絶やさず、いつも楽しそうでした。歌うように過ぎているなあ、という気がしました。

シスターたちは、剃髪して、基本的に何も所有しません。月に五千円のお小遣いをもらえると聞きましたが、質素な相部屋に住み、夏・冬用の茶色い法服や下着をなん枚か持つ。チャイさんはバイオリンを持っていますし、ほかのシスターも自分の大事なものを少しは持っていられることでしあうが、基本的な持ち物は、ごくごくわずか。

そして、自分自身の能力やエネルギー、心と愛、そして性も、ほかの人々への奉仕に向けられています。

どのような苦悩を経て、剃髪する(=髪の毛を剃りおとす)とことを決断したのか、聞きたいたところでしたが、言葉の壁で聞くことができません。それも残念なことでした。

— 今生きていることを楽しむこと

何回かのハン師の法話は、ほぼ人の心の中の平安をどうしたら築けるか、ということを中心でしたが、社会の平和を作り出すには、まず、人の心が平和でなければならぬ、

いちばん私の心に残ったのは、「走らないで」、立ち止まつて、自分自身の命を味わい、たのしむ、ということです。静かに、静かに、大地にしつかり足をつけて大地とつながる…、鳥の声、風の音を聴き、花を愛で、頬をなでる風を感じて、その瞬間、自分が生きているということを味わい、たのしむ…。

ハン師は、その著書の中で、こう言っています。

「しつかりと落ちついて坐り、… そして自分の真のすがたに立ち戻ることは喜びです。… いま、この瞬間こそが、私たちのいのちの実在の瞬間です。私たちは、いま、こゝ、この暖間でしか生きられません。」

ハン師は言います。

「本当に幸せな人は、完全にこの現在の瞬間に生きています。不幸の兆しや暗い予測に気をとられることなく、困難

な状況にあつてもすべての人に利となる道をつねに摸索し  
ています。幸せな人は他の人々と力を合わせ、他の人々に  
力を貸します。彼らにとって、幸せとは達成すべき目的で  
はなく、毎日の生活における現実なのです。」

「この現在の瞬間に戻つてください。今を完全に生きて  
ください。もう走る必要はありません。いまここにある生  
命の驚異にふれてください。これは平和の実践の基本です。  
これができれば、私たちは戦争によつて受けた被害や、暴  
力や憎しみによつて受けた被害、誤解によつて受けた被害  
を、修復できるだけの強さと喜びが持てます。：日常生活  
のどの瞬間にも平和でいられる生き方をしてください。」  
(「あなたに平和が訪れる 禅的生活のすすめ」ティック・ナット・  
ハン著 アスペクト刊 一〇〇五)

— 気づくこと

心が平和であるために必要なことは、「気づく」とだと、  
師は言います。

どんな人でも、心中に、怒り、憎しみ、恐怖、苦しみ、  
不満、嫉妬、悲しみの種を持っている。

それらの感情を、抑えることは、自分に対して暴力を  
ふるうこと。だから、抑えこまないで、それらが自分の心  
の中にあることに、まず「気づく」ことが大切だと。

「私の恐怖、私はあなたがそこにいるのを知っています  
よ、と。それから意識的に呼吸をして、その感情を鎮めて  
やります。私は深く息を吸うことで、自分の中に恐怖があ  
ることに気づきます。それから深く息を吐いて、私の中の  
恐怖心を鎮めるのです。

自分の感情を認めないと、自分で自分にふるつて  
いる暴力がいつのまにか内面にたまっていきます。(同)

「気づき」とは、自分が何を考え、何をしているかを立  
ち止まつて認識すること。

自分を認識すると、自分の苦しみや他人の苦しみの本質  
を見抜くことができる。

そして、そのように洞察できれば、まわりと調和して安  
らかに生きるために何をすればよいか、何をしてはいけ  
ないかがわかるー。

その気づきの力を養うための二つの重要な実践が、「意識  
的な呼吸」と「意識的な歩行」だとハン先生は言うのです。

## 一 五つの気づき

ハン師は、五つの「気づき」の訓練がある、と言います。

これらは、仏教の教えでることに気がつきました。そして、釈迦國の王子であつた人、お釈迦様を「ブッダ」というのは、「ブッダ」が、「目覚めた人」という意味であつたことも思い出しました。

一、殺生<sup>せつしゅう</sup>によつて生じる苦しみに気づく。

生命に敬意<sup>せうじ</sup>を払う

「気づくこと」というのは、「めざめること」につながるのでしよう。

二、搾取<sup>さくしゅ</sup>、社会的不公正、窃盜<sup>せつとう</sup>、抑圧によつて生じる苦しみに気づく。

寛容<sup>かんよう</sup>になる

お經<sup>おきょう</sup>にある、いわゆる「不殺生<sup>せつしゅう</sup>」「不偷盜<sup>ちゅうとう</sup>」「不邪淫<sup>じやいん</sup>」「不妄語<sup>ぼうご</sup>」「不飲酒<sup>ごんしゅ</sup>」の五戒<sup>ごかい</sup>（五つの戒め）ですね。本来仏教徒である私たちには、なじみのある言葉です。

三、性的不品行によつて生じる苦しみに気づく。

性的責任を果たす

そして、ハン先生は、「この気づきが基盤にあれば、自分や他人の苦しみを取り除いて、平和をはぐくみたいと思うように」なると言います。

四、他者の話が聞けず不注意な発言をすることによつて生じる苦しみに気づく。

深く耳を傾け、愛をこめて話す

師は言います。  
「いつたい現実とは何でしよう？ 誰もが苦しんでいる  
一 それが現実です。

五、不注意な消費によつて生じる苦しみに気づく。

意識的な消費をする

豊かな人と貧しい人がいる。北の人と南の人人がいる。黒い人と黄色い人と赤い人と白い人がいる。

私たちには毎日のように有毒なものを消費している。私たちの世界には兵器産業がある。

私たちには自分のための、他の人々のための時間とエネルギーがない。

私たちは不注意な生き方によつて人命を破壊し、他の種を破壊し、環境を破壊している— これらすべてが現実です。私たちの子供や、そのまた子供たちのために未来を望むなら、ぜひとも時間をとつて現実の本質を深く見つめる必要があります。深く見つめれば、真相が見抜けます。その見抜いたことをもとにして、行動できます。」

リトリート最後の夜に、今後の人生でこの五つのことを誓える人に対してそれを認証する、受戒式（認証式）のようなものがあつて、娘は参加して、認証状をもらつたりしていました。（えらいね！）

### — 相互につながつている

リトリート最後の夜に、今後の人生でこの五つのことを誓える人に対してそれを認証する、受戒式（認証式）のようなものがあつて、娘は参加して、認証状をもらつたりしていました。（えらいね！）

そして、もうひとつ。気づきの訓練が私たちに教えてくれるのは、「相互につながつている」という現実だと、ハン師は言います。

わたしたちは人間として、ただ一人では存在できない。他の人々や、他の動物、植物、土壤を必要としている、つまり互いにかかわりあい、「相互につながりあつて存在する」ことしかできない。

たとえば、意識的に物を食べていれば、自分の前にある食べ物には、さまざまな生き物の存在と努力が集約されていることに気づくことができる。これは、とてもよくわかる教えです。



受戒式で

「家族も、社会も、一つのサンガ（精神的共同体）です。地球とそこに住むすべての生命も、一つのサンガです。したがって、私たちはサンガとして生きることを学ばなければなりません。そこには人間だけでなく、他のすべての種も含まれます。動物、植物、鉱物を、すべて私たちのパートナーとみなし、私たちの共同体の一員としてとして受け入れなければなりません。」（同）

周囲の苦しんでいる人々に救いをもたらしながら、自分自身も強く保つていられるようにしました。私たちは仏陀の自己防衛と自己治癒に関する教えを自らの修練に用い、その教えを世界に広めました。これが『行動する仏教』の本質です。」

## — 火の海に咲く蓮 — 「行動する仏教」

い僧をしていました。

「私たちが目指していたのは、和解であり、二つの陣営を一つにすることでした。こういう立場をとるのは非常に危険なことです。たとえ私たちが自分の中の愛の心、菩提心によって行動しているとしても、戦っている両陣営はそれを理解せず、私たちのメンバーの多くを殺しました。

しかし、本当の殺害者は誤解でした。わたしたちは人々を助けたいという思いと愛だけを武器とした非暴力の軍隊でした。しかし、ふつうの軍隊と同じように多くの犠牲者を出しました。ブラザー・ナット・トリは七人のソーシャルワーカーとともに、遠くの村への移動中に殺害されました。私は彼ら全員のことを息子や娘のように思っていたので、自分の血を分けた八人の子供をいつぶんに亡くした父親のような気持ちでした。そして、とてもなく苦しました。」

「：『行動する仏教』は苦しみと戦争の産物でした。言うなれば、火の海に咲いた蓮の花のようなものだつたので

す。」

## — 平和は可能である

一〇〇一年の夏にプラム・ヴィレッジを訪れた八〇〇人ほどの参加者の中に、数十人のパレスチナ人とイスラエル人がいたそうです。

そして、わずか二週間の実践でパレスチナ人もイスラエル人も兄弟姉妹の共同体になっていたそうです。

ハン師は言います。

「私たちが何をしたために、彼らは…： 幸せと平和は可能であるーを実感できたのでしょうか？ 正直に言つて、たいたことはしていません。私たちはただ、この中東から友人たちを兄弟姉妹として歓迎しただけです。彼らは私たちといつしょに歩きながらの瞑想を学びました。立ち止まって現在の瞬間に存在することを学びました。そして自分の周囲や自分自身の中にある心地よいもの、滋養となるもの、自分を癒してくれるものに触ることを学びました。実践そのものは非常に単純ですが、ともに実践する共同体に支えられ、彼らはそれぞれの中にある平和と幸せに、一人で実践するよりもずっと早く触れることができました。

「私たち全員で実践の基本に従つて、すべてを意識的に行ないました。人生に深く触れるため、一瞬一瞬、自分をしつかり確立しました。息をするときも、歩くときも、話すときも、歯を磨くときも、食事用の野菜を刻むときも、皿を洗うときも、気づきを実践しました。こうした基本的な日常の実践を彼等は学びました。

わたしたちサンガのメンバーは彼らを支えるために、彼らとともに座り、哀れみをこめて彼らの話を聞くことを実践しました。

「彼らにどういう話し方をすれば、相手が聴いて、理解して、受け入れてくれるか」と教えました。

「彼らは誰かを責めることも批判することもなく、穏やかに話しました。そして自分や子供たちや社会が受けってきたあらゆる苦しみを互いに伝えあいました。それぞれ全員が、自分の恐怖、怒り、憎しみ、絶望について話す機会を得ました。多くの人々にとつて、そうやって話を聞いてもらい、理解してもらつたのは初めてであり、それだけでずいぶん苦しみが和らぎました。彼らが思つていることを口に出して、自分を癒すのを助けたいという思いから、私たちは心を開いて、深く耳を傾けました。

「深く耳を傾け、愛をこめて話すことを実践した二週間は、

参加者にとつても、私たちプラム・ヴィレッジの住人にとつても、たいへん喜ばしいものとなりました。私たちはこ

れらの話を聞いて、ベトナム人もベトナム戦争中にひどい苦しみを味わったことを思い出しました。それでも実践により、わたしたちは当きょうもいまも、この世界を美しいと感じられ、あらゆる生命の驚異を毎日のように実感できます。だから私たちは、中東の友人たちも、私たちと同じく戦争のさなかあっても実践ができるはずだと知つていました。

戦時中、ほんの二四時間でいいから停戦が実現しないかと強く願つたことが何度もありました。二四時間だけでも平和になれば、息を吸い、息を吐いて、花々や青い空に微笑みかけられるのに、と私たちは思つたものです。しかし実際、戦争のさなかにも呼吸や微笑は実践できました。花でさえ、戦火の中で咲く勇気をもつていたからです。それでも私たちは二四時間の停戦を望みました。自分たちの上に爆弾が落ちてくることがなくなるのを望みました。」

平和は不可能ではないのです  
— 愛とあわれみと和解



さらに、ハン師は言います。

「暴力と憎しみの解毒剤は哀れみです。」

「憎しみに憎しみで応じることは憎しみを千倍にするだけだ、と仏陀は言いました。憎しみにあわれみで応じることだけが憎しみを崩壊させる方法です。」

「深くみつめれば、苦しんでいるのは自分ばかりでなく、他人も深く苦しんでいるのだとわかります。自分が属する集団だけでなく、他の集団も苦しんでいるのだとわかります。ひとたび気づけば、処罰や暴力や戦争が答ではないとわかるでしょう。」

「自分の中で憎しみが成長するのを許しているかぎり、私たちはいつまでも自分や他人を苦しめます。近年におこつた戦争を深く見つめて、憎しみと誤解をあわれみにかえなくてはなりません。私たちを苦しめている相手もまた被害者なのだと気づかなくてはなりません。ベトナム戦争で父や兄弟を殺された多くの人々が、苦しみを乗り越えて敵のベトナム人やアメリカ人と和解できています。彼らはそれを自分のために、そして自分の子供たちのためにやりま

した。」

「愛情をこめて語りかけ、相手の話をじっくり聞こうとしている人は、言い換えれば平和を実践している人です。このような人は、理解と平和と和解への道をひらいてくれます。こういう人は誰もが心を許します。：しかし残念なことに、私たちの多くはこの能力を失っています。平和を実現するためには、第一に互いを理解できなければなりませんが、愛情のこもったコミュニケーションなくして互いを理解することは不可能です。したがって、平和の実現にはコミュニケーションを取り戻すことが必須です。コミュニケーションはすべての基礎であり、これがあってこそ非暴力が実践できます。」

「サンガの川は、調和と気づきとあわれみの道を実践する友人たちの共同体です。」

以上、ハン師の教えを、その著書からまとめてみました。少しばかりは実際に体験したとは言え、よくわかつていないので、まとめるのは、とても難しく、なかなか進みませんでした。ただ、なんとしても平和を実現したい、という強い願いがハン師を突き動かしてきたことは、わかつたように思われました。

れました。

でも、実践するのは、難しい。だから、プラム・ヴィレッジのような、実践道場が必要になるのでしょうか。

村で過ごした時間は、ほんとうに平和で、あたたかく、心地よいものでした。

もういちど、英語を習得して、いろんな国の人たちと心を交わすことができたらな、と思います。

最後のお別れの日に、どなたでしたか、今度は八十歳になつたらきてくださいね、と言つて下さった方がありました。ほんと、そくなつたら楽しいかも…。もし、八〇歳でまたフランスをおとずれることができたら、あのとても若かったシスターたちはどうなつているでしょう。

また世界は、十年後、少しばかりは平和な世界になつてているでしょうか…。

## お絵描きの先生になる の巻

ところで、この、滞在五日めのこの日、驚いたことに、私は、ジーナさんと若いシスターから、絵を教えて、と頼まれました。

フランスに来てから、パリでも、小さなスケッチブックにササッとかんたんなスケッチを描いてきました。もともと絵を描くことなど得意でも好きでもなかつた私ですが、この通信の「おフランス記」に絵を入れるために、おもしろいだなと思うものがあると、スケッチしてきたのを、この何日かの間に眼にしてきたのでしょう。私も、絵を見せて、とだれかに頼まれると、平氣で見せてきました。そんな絵が氣に入つたのかもしだれませんが、私にすれば、驚天動地！私が絵の先生になるなんて、『お笑い』です。

ええ？ そんなん、教えることなんか、あれへんし、と思ひ、でも、三人の人から乞われて、なにか教えることがあるかなあ、とちよつと考えてみることにしました。でも、教える、と言つても、自分がどんなふうに絵を描いているか、ということしか人に言えることはないよなあ、と思い、じゃあ、と、いつたいどんなふうに自分が絵を描いているかのかなあ、と改めて考えてみたのです。

とくに絵を描くことが好きでもなかつた私は、まず、とにかく下手でもいいから自分の描いた絵を、自分の個人通信に載せること、を目的に描いてきました。

「下手でいい」をモットー？ にしています。いつもあまり時間もないでの、そんなに時間もかけません。多少丁寧

に描くときもありますが、ほとんど書き直しもせず、ぶつきらぼうな絵で、へたくそでもいいから、ともかくにも描く、というふうにして描いています。

つぎに、下手なので、「描こうとするものを見せる」「ことにしています。別に主義でも、モットーでもなく、よく見ないと描けないので、とにかくとにかく、よく見て描きます。

まあ、自分がどんなふうに描いているかというと、そのふたつ、つまり「下手でいい」と「よく見る」くらいだよなあ、と思い、しかたがないので、その二つを教える（「教える」なんて、言うも、おこがましいことです）ことにしました。

午後、シスターたちが少し自由になる時間に待ち合わせて、ジーナさんとシスター

といつしょ絵を描くことにしました。

と言つても、それも片言の英語での会話

ですので、一度は、う



お絵描き教室

まく通じなくて、待ち合わせが失敗。けつきよく一度だけ  
いつしょに竹林を描きました。それが51ページの絵です。  
そして、いつしょに絵を描いたシスターが、スケッチして  
いるようすを写生したのが下の左の絵です。ジーナさんの  
似顔絵も描きました。

色鉛筆を持つてくるのを忘れたので、ジーナさんに色鉛  
筆を借りたりしました。

これで、私はすっかりシスターたちの絵の先生になつて  
しまい、通りすがりに「マイ ティー チャー」などと声を  
かけられたりしました。あきれたもんです。

ジーナさんも若いシスターたちも、みなさんとてもかわ  
いくて、歳はなれていますが、友達のようになりました。  
今も思いだすと、とても懐かしく、すばらしい思い出にな  
りました。

(チャイさんは、この十一月に、二人の指導的なシスター  
といつしょに来日し、安曇野にも見える予定なので、会  
えます。チャイさんは、すぐれたプロのバイオリニストで  
したのに、とても謙虚で、かわいい、しかも賢い人でした。)



この日、いつしょに外のテーブルで食事をしたインド系と思われる、色が浅黒くて、美人の女性二人に、ちょっと描かせてもらつて、サインしてもらつたら、お二人ともインド系ではあるけれども、一人は、スエーデン在住で、一人はスイス在住と聞いて、これもびっくり。

私と娘のいる部屋の前は広い中庭になつていて、そこで、数人の子どもたちが、毎日、中庭じゅうを、はだしで走り回つて遊んでいましたが、その中の一人の男の子に、顔を描かせてもらつて、サインしてもらつたら、その子はノルウェーの子だつたり…、とにかく見る人、知り合う人、みな違う国の人、というのは驚きでした。（四一ページの絵）この子どもたちのグループのボスは、中では歳かさの、小学校高学年くらいの女の子でした。非常に活発で、その子が、中庭の真ん中にすえてあつた、花を植えるための大きな木の鉢の中身がからつぼのとき、どーんと鉢の中に飛び込んだりして、とうとう鉢の底が抜けてしまつたのを目撃しました。この子がどこの国の子だったのか、聞かずじまいになつたのが、いささか残念でした。

（この、直徑一メートルもありそうな大きな木の鉢は、けつきよくバラバラになつて、シスターたちが始末しましたので、今はありません！）



## 八日目—— チャイさんたちのコンサート

さて、リトリートの毎日も過ぎて行って、滞在八日目の十二日は月曜日で、午前中は、予定のない日でしたので、ジーナさんたちと一度お絵描き教室。

その午後、急にチャイさんが、上の宿舎・アッパー・ハムレットで、弦楽四重奏をすることになった、と言われるので、娘と二人、いっしょに車に乗せてもらって、アッパー・ハムレットに出かけました。バイオリンを弾ける人が二人来ている、ということでした。

別に気の張ったコンサートではなく、たまたま弾ける人が何人か集まるので、じゃあ合わせてみようか、ということになつたもようです。

聞くとイスラエルの指揮者の一家が来ていた、その奥さんはバイオリニスト、娘さんも、プロのバイオリニストをめざしているおじょうさん、ということです。この方たちは、毎年来ていて、いつもいっしょに演奏することでした。

お嬢さんは、高校生くらいの歳に見えました。アッパー！

ハムレットにいる、チエロを彈けるブラーもやってきて、演奏者がそろうと、じゃあどこでやろうかね、というふう

な話し合いがあり、外の竹林のそばでやることになったもう一つです。

竹林に演奏者があつまると、今度は、じゃあ、今日は何を弾こうかね、というような話し合いのようです。チャイさんが第一バイオリンを弾きます。

いよいよ四重奏が始まりました。モーツアルトだつたでしょうか。指揮者のお父さんは、娘さんの椅子のうしろの草の上にすわっています。もしかしたら有名な方なのかもしません。

四重奏が始まると、少しづつその音を聞きつけて、宿坊の人達が集まり始めました。芝生の上の椅子に座ったり、草地にねそべったり、思い思いのかつこうで、響きに耳を澄ませます。

演奏の途中、あ、失敗した、と初めからやり直したこともありました。演奏者も、聴衆も、ただ、楽しむために弾いたり、聴いたりしているという、ゆつたりした雰囲気です。

なんだか、天国にいるような、ほんとうにたのしいひとときでした。

翌日は、私の七十歳・「古稀」の誕生日。誕生日の前祝いをしてもらつたような気がしました。



## 九日目 — 最後の日 — 古稀の誕生会

さて、翌日はこの宿舎ともお別れという、僧坊滞在さいごの日の七月十三日。

この日は、下の宿舎・ロウワー・ハムレットに、またバス二台で参加。午前中ナット・ハン師の法話がありました。

この日の法話は、ほとんどうつらうつら眠っていて、お話を聞かず。朝の瞑想の時間もおさぼりして、洗濯したり。

最初着いたころは、持ってきたフランス史を読む時間もあつたのですが、だんだん自由な時間がなくなつて、夜も遅く、朝も早い、というスケジュールで、少々疲れてきておりましたし……、と言い訳……。

このロウワー・ハムレットは、子どもたちの遊び場が広く、遊び道具もいろいろあって、各国の子どもたちがたくさん遊んでいました。まるで、子どもたちの天国のようでした。

午前中のスケジュールがおわり、またバスで自分の宿舎に戻りましたが、シスターたちも忙しいのか、宿舎に帰つても、もう絵を描こうと言ひにこなくなりました。

でも、時間をみつけて、ジーナさんと一緒に写真を撮つてもらつたりしました。

さて、ついに滞在最後の夕食の時間がきました。

朝食と昼食は、どこでだれといつしょに食べてもいいのですが、夕食だけはいつも日本人の多いグループで、食堂で食べることになりました。

この日、いつものように、お皿に食べ物をのせて、食堂に行つてみますと、いつもはただ平行にずらすら並んでいるだけの長テーブルが、四角に並べられています。もう何人か席についていました。

すると、だれかが、私に一番奥の真ん中に座るように言います。あら、やだ、私はここでいい、と言いましたが、だめだ、真ん中に、と言われ、しぶしぶ中央の席に座りました。

なんと、私の誕生パーティーだというのです。  
食事がほぼ終わると、大きなデコレーションケーキが二

つ、私の前に運ばれてきたのにびっくり。

ケーキの真ん中に「七十歳」と書いた小さなカードがのつかっています。あれえ、と思ううちに、お祝いのカードを、いくつも手渡されました。これにもびっくり。

いちばん大きなカードには、このグループの全員のお祝いの言葉が書き連ねられてありました。日本語ができない人は英語で書いて下さっています。シスターたちのことばもあります。

まあ、こんな豪勢な誕生日は、生まれてはじめて。古代より稀な年齢にして、今までの人生でも稀なる、豪勢な誕生会となりました。

みなさん、誕生日をすると知つていて、私には黙つていたのです。

あとで、娘に聞いたところによると、ケーキは、娘があるシスターに、一週間も前から、「あなたの母さんの誕生



まあ、私めは、なんてうれしそうなんでしょうね。左はシスター。右は娘。



豪華なケーキ。これで、1000円！

日祝いのケーキ買つてくるから」と言われていたそうです。日本に帰つてから、「私がお金出してんよ」と言つていました。ほんとうに秘密裏? にことは運ばれていたのでした。

さて、誕生会では、私のとなりに、年配のシスターが座つていて、司会をします。このシスターは、お料理が上手で、このシスターのおかげで、わがハムレットは、食事がおいしいんだとか、聞きました。

最初にみなさんが「ハッピーバースデイ・トゥユー」の歌を私のために歌つてくださいました。

歌が終わると、シスターが、私に、なにか一言言え、とおっしゃるので、「まあ、こんな豪勢な誕生日祝いは生まれはじめてです。ここに来たのも、なりゆきで、まあヨーロッパ見物くらいしてもいいかな、くらいの乗りで来ただけで、朝の瞑想もさぼるし、不まじめな参加者なのに、こんなに祝つていただきて、うれしいです」といつたようなことを言いました。

すると、シスターが、トモコもなにか歌え、と言うので、「いいわよ」と言つて、立つて「夏は着ぬ」を歌いました。

日本に帰つてから、歌は、「夏の思い出」にしたらよかつた、「夏の思い出」なら、日本人みんなで歌えたのになあ

と、とても残念に思いました。

歌いおわると、シスターは、私に、つぎになにかダンスマしなさい、と言います。私は、また、「いいわよ」と言つて、すぐ立つてお得意の?ダンスを始めました。

お得意のダンスは、ただ一つ。

盆踊りの炭坑節です。これしかない!

すぐに、前奏のスチャラカチャン、スチャラカチヤンチャンから始め、「月はゝ、出た出たゝ、月はゝ出たゝ、ヨイヨイ」と、みんなのテーブルの周りを踊り始めました。(さすが、七〇歳。羞恥心は捨てています)

しばらくたつてふと気がつくと、全員が、私のあとについて、踊つてゐるではありませんか。シスターもいつしょです。いい加減なおどりなので、どうも歌と振りがあわない、まあいいや、と思って一応最後まで踊りました。

帰国してから、娘の撮つてくれた、私の踊り始めの様子を撮つた写真をみると、まあ、なんともぶつかつこうではあります。(よく恥ずかしげもなく!…)

娘もいつしょに踊つたため、みんながいつしょに列を作つて踊つてゐる写真は撮れなかつたそうです。それは、いささか残念でした。

この踊りのあと、今度は、日本人グループの中の、中島

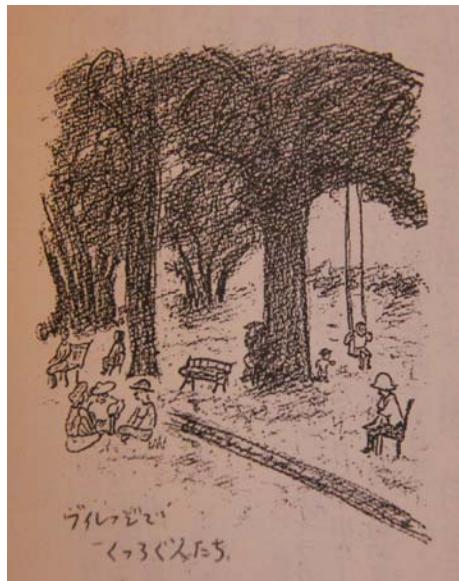
直人という方が、自分で作った和紙の太鼓と、中国の古楽器の笛の演奏を披露してくれました。太鼓を手で持つて、指を使って微妙な仕草でたく、という演奏法です。まだ四十代半ばくらいの方です。

この方は、プロの演奏者で、この夜、いろんなスケジュールが終わつたあとに、もういちど、瞑想ホールで希望者に演奏を聞かせてくれましたが、どこか遠くから響いてくるような、とても美しい、静かで深い音色に魅せられました。

中島直人さんの  
演奏 →



日本人グループ  
で、記念写真  
↓



さて、誕生日のお祝いには、アニーさんやジーナさんや私のお絵描きの生徒?のシスターたちからも、本やノートや陶器のお皿や、ハン先生の立派な写真などをいただきました。あとで、チャイさんからもいただきました。ほんとうに豪勢なお誕生会でした。皆さんからいただいた本は、ハン先生の著書で、英語です。（帰つてから、辞書を手に、少し読みました。これらを読めるようになつたら、英語が少しは通じるようになるかしら？）

こうして、最後に花を咲かせて？翌日、親しくなつたみなさんともお別れして、パリにもどりました。

プラムヴィレッジで



フランス人（右）とベトナム人  
（左）のブラザー・お坊様



ヴィレッジで、三々五々、くつろぐ参加者



11月に日本に来るシスター・ソアイ  
右は、日本人のシスター・チャイさん



歩く瞑想のあと、休んで瞑想している参加者



ベトナム人の若いシスター



ブラザーやシスターの合唱を聞く参加者。  
このあとにハン師の法話がある。



食事の支度をする参加者。働くのも、喜びをもってする。これも、瞑想の一つ。



娘の「自然農」の話を聞く人達。  
右から二番目は日本人のN子さん

一〇〇〇年前にできた古道とか。宿そのものも、紀元一四〇〇年に出来た建物だそうで、おどろき！  
私たちの部屋は、とても狭いまわり階段を昇った二階の部屋。階段の床は木。壁は石づくり。鉄のてすりを伝つて、昇ります。

部屋は狭く、二台のベッドできちきち。何もなかつた部屋にトイレとシャワールームをつくつたために、余計狭くなつたのでしよう。シャワールームもとても狭い。ごく小さいテーブルと、洋服掛けの小ダンスがついています。部屋の床も羽目板ですが、床が少し平らじやなくて、歩くとちよつとよろめいたりして、なるほど古い宿であることを実感します。

でも、階段の床も部屋の床も、よく磨かれていて、とても清潔な感じですし、部屋の壁も漆喰のようですが、明るい色に塗られていて、いい感じです。それに、さーすが！窓にかかつた、足元までのカーテンがおしゃれ。すてきな柄です。

古い物が好きな親娘なので、パリのなかでも、最も古いラタンという、大学のたくさんある学生街です。

この宿も、娘の努力で、古いけれど、お安い宿。古い、

と言えば、宿の方の説明では、宿の前の通りは、なんと、  
宿の前は、石畳の道。両側にいろんな店があります。

## ふたたびパリへ

十四日の朝、九日間泊った、ボルドー地方の、サントフォアアラグランデのプラム・ヴィレッジを出発。午後四時ごろにパリにもどつてきました。

パリの今度の宿も、パリの中心街で、有名な、カルチエ・

ラタンという、大学のたくさんある学生街です。

この宿も、娘の努力で、古いけれど、お安い宿。古い、

と言えば、宿の方の説明では、宿の前の通りは、なんと、

古い物が好きな親娘なので、パリのなかでも、最も古い歴史のあるこの場所が気に入りました。

この宿に一泊しました。

宿の前は、石畳の道。両側にいろんな店があります。

## パリ祭の日

パリの宿におちついたあと、もう一度街を散策することにしました。

この日は、七月十四日。革命記念日がお祭りの日になつてゐるのですね。

一七八九年のフランス革命は、勃発後、まもなく挫折しました。

その後、ナポレオンが「皇帝」になつたり、ナポレオンも失脚すると、王政に復古したり、と思うと、また共和政になつたり、それからまたもや帝政になつたり、共和政にもどつたり…で、十九世紀のフランスの歴史は実に目まぐるしい。

その中でも、脈々と自由や平等を求める声は引き継がれてきたようですし、そのきつかけになつたフランス革命は、のちのちまで、ヨーロッパ全体、世界全体に大きな影響を与えたました。

ちょうどこの七月十四日が、民衆がバステイユ監獄を襲撃した日。それが国民的な祭日になつてゐるのです。

## バステイユ監獄跡

さて、パリは、夜十時ごろでもまだ薄明るく、お祭りの日とて、街は、あちらもこちらも、たくさんの人で、夜遅くまで大賑わい。陽気なフランス人が、よりいっそう陽気で、たのしそうです。というより、いよいよヴァカンスが始まるので、解放感でいっぱいだったのかもしれません。

さて、どこに行くか？ おかあさん、バステイユに行きたい？と娘に聞かれ、行きたい、行きたないと答えました。バステイユ監獄、と言えば、フランス革命で有名です。どんなところなのでしょう？ 例の「鉄仮面」も、この監獄につながっていたとか…。

この日はずつと歩きです。ずいぶんあちこち歩きました。若い娘の足にどうしても遅れがちですが、見栄はつて！ ち

よつと小走りに走つて見せたこともありました。

さて、かなり歩いて、バステイユにつきましたら、なんのことはない、監獄のあつたところは、児童公園になつていました！

わりあい小さな公園で、子どもたちが、すべり台やブランコであそんでいるのを、しばらく公園の外で、眺めていました。

平和だね、と思いながら、公園のそばをさらに歩いて行くと、つきあたりにバステイユ広場、というとても広い広場があつて、車がいっぱい行き交つていました。実は、この広場が、むかしバステイユ監獄があつた場所だそうです。バステイユ要塞とも言い、武器を求めて、民衆がここに押し寄せたんだそうでした。監獄には、あまり囚人はいなかつたそうです。

広場を見て、こんなに車が走る場所もあつたんだ、と思いました。その車のひつきりなしに通る、とても広い通りの広い歩道に、いくつものカフェが張り出しています。通勤の帰り道でしようか、人も大勢行き来しています。

「フランス史」によると、実は、パリも、相当改造されているそうで、十九世紀の後半、当時のパリ知事オースマ

ンによって、古い家は取り壊し、あとに直線の大通りがでたり、高層の建物が立てられたりしたこと。エッフェル塔建設をめぐっても、激しい論争があつたとか。

初代ナポレオンの甥の皇帝ナポレオン三世が、クーデターで政権をとつたことです。

パリ改造の目的には、さまざまあるようですが、一つのねらいにつぎのようなものがある。それまでの狭い路地が入り組んだパリ市内では、容易にバリケードを築けた、パリの市民は事あるたびにバリケードを築いて抵抗してきた、そんな伝統的な民衆の地域の一掃をねらつた…。

現に、そのねらいは成功し、その後、市街戦型の都市の騒乱は激減。労働者は家賃の上がったパリ中央部にすむことができず、市街への移住を強いられた、そこで、パリをとりまく郊外が、その後左翼勢力の基盤となる「赤い帯」地帯となつた…。

こんなことは、日本に帰つてから本で知つたことですが、パリは、歴史を遺した街だと思っていたのになあ、実際のところは、旅行者には分からぬもんだなあ、と思つたことでした。

セーヌ河岸自動車道路の建設とか、改造は、今もつづいていて、そのたびに、激しい賛否両論が持ち上がるそうで

す。

さて、歩き疲れたので、それに例のごとく街にトイレはないし、で、フランス語のメニューを見て、見当をつけ、バステイユ広場の前の一軒のカフェに入ることにしました。お高いのは避け、サンドイッチとオムレツを一人で分けていただきました。

バステイユ広場は、あたらしいオペラハウスもあるという、新名所の広場でしたが、だだつ広いだけで、あまりいい感じの場所ではありません。

それでも、フランス人は、人や車のやたら多くて、あまり景色のいいところではなくても、平気で食事をしたり、お茶を飲んだりしています。まあ、男性も女性もおしゃべりするのが、目的なのでしょうね。

ただし、先に言いましたように、排気ガスの臭いがほとんどしないので、その点は、いやじやありません。

カフェの白い制服を着たボーイさんたちは、若くて、きびきびとともによく働きます。そして、例にもれず、とても陽気！たのしそうに働いています。

つい、写真を撮らせてもらいました。

ついでながら、私が娘に、肌身離さず？ 持ち歩いている

図書館のフランスの手引書に「あんたなあ、せめて表紙ぐらいたしたら…」と言つたら、娘は即座に、こここのカフェの皿の下に敷く紙マットがきれいだったので、それを本の表紙にしました。

その様子を見たボーイさん、おやまあ、と感心したふうで、別のボーイさんを連れてきて、「ほれ、この日本人がこんなに器用に、うちの紙マットを本の表紙にしたよ」とでも言つたようでした！



陽気なボーイさん。

その後、閉館中でしたが、ビクトル・ユゴーが十六年間家族と住んでいたという住まいを見に行きました。もど王の館だったという、広い中庭のある大きな館の一角にユゴーの住んでいた部屋がありました。

さらに歩いて、ユダヤ人街に行つたりしました。

ユダヤ人街も人がいっぱいでした。

ユダヤ人街で、人が行列を作っていたパン屋さんに、同じように並んで、野菜とヒヨコ豆のコロッケをはさんだ白いパン・ピタパンを買い、ふたりで半分こして、歩きながら食べたりしました。評判の店らしく、なかなかおいしかったです。

この夜、さんざん歩きまわって疲れましたが、なんかパリの住民になつたような気分で、おもしろかったです。夜の十時半ごろ、宿に帰りました。そのころでも、まだうす明るくて、まだまだたくさんの人出でした。



薄く焼いたパンに生野菜がたっぷり。黒いのはケチャップ。



ユダヤ人街で並んでピタパンを買う

## 儉約の旅

ちなみに、パリでは、儉約の一途で、おフランス料理もいちどもいただかず、ワインも飲まずじまいでした。せめてワインをお土産に買って帰ればよかつたのですが、重いので、それもせず。留守番の、飲み助の夫には気の毒しました。（ゴメンネ、トウチヤン！…ココデ、アヤマツテオコウ…）

さて、ボルドーでの九日間は、完全菜食の給食だったし、パリでは、素泊まりなので、たいていは、パン屋さんでパンを買い、野菜はスーパーで買って、宿で、持参の、よく切れる小刀できゅうりやトマトなどの野菜を切って、食べました。普段から、そもそもが野菜中心の粗食なので、パンと野菜でまんぞく。それより、パリのスーパーで、野菜を買うのも、パン屋さんでパンを買うのもおもしろい。まあ、だいたいが娘が買ってくるのですけれども。

そして、おさじやコップは、機内食の使い捨てのものを取つて置き、パリの外食時の使い捨ての紙の器や紙類なども、いろいろ大事に取つておいて、再利用。ドレッシングやジャムやバターなども、機内食の余つたのを、これも大

事に取つておいて、利用。だつて、ドレッシングだつて、みんな捨てるようなので、おそろしいばかりのもつたいなさですもの。

とにかく「環境クソ婆」（娘のこと）と、娘に準じる、その親の二人連れでありますから、とびつきりの、エコ旅になるのは、しかたがありません。

でも、なかなかたのしく、おいしいエコでもありました。フランスのパンはおいしい、と聞いていましたが、特に、クロワッサンは、日本のクロワッサンとは、全然ちがいます。前に書きましたが、すごくでかい。その上、とてもおいしいのです！ というわけで、食事はいつもおいしく、たのしく、そして、超お安く、いただきました！



豪華？なエコ おフランス食事

## パリ滞在最後の日

翌日の十五日は、パリ最後（フランス最後の日でもある）の日なので、午前中、空港に行くまでの時間、娘と一人で、もういちどパリを散策しました。歴史の古いところなので、いくらでも、行きたい所、見たいところはあります。

この日は、朝八時半に宿を出ました。

まだ早い時間なので、通りは、足早に歩く通勤途上らしい人たち、通学の学生たち、店の準備で忙しい人たちで、にぎわっていました。

カフェなどで、前夜遅くまで働いていた人は、どうしているのだろう、とちょっと心配になりましたが、日本の「カローシ」にあたる言葉は、フランスにはないようなので、夜働いている人とはちがう人たちが働いているんだろうと思ふことにしました。

ちなみに、宿では、宿に着いた午後四時ごろのカウンターの人は女性で、夜一〇時半ごろに宿に戻ったときは、黒人の男性でした。そして、朝は、別のフランス人の男性がカウンターにいました。小さい、素泊まりの宿なので、受けつけには、いつも一人いるだけでした。

階段をお掃除してくれていたのは、別の男性のフランス

人？でした。（白人だと、どこ出身の人か、まったくわからぬ。私たちも、日本人だか、中国人だか、朝鮮人だか、まったくわからないのと同じでしょう。お掃除の方は、移民の人かもしません。）



ゴミ収集車のおじさんたちも陽気！

夜のカフェで客が飲み食いする準備は、こうして朝から始められているんだなあ、と納得しました。

街として有名な「カルチエ・ラタン」も歩きました。なんだか本屋さんが多いなあ、と思っていたところ、あちらにもこちらにも大学があるのです。

第五大学、第六大学などとあつて、学生たちが、三々五々、大学の入り口をはいつていきます。

通りはみな歴史的な古い建物ばかりなので、大学かなにか、ちょっと見ただけではわかりません。普通の通りの普通の建物なのに、よく見ると、なんとか大学という看板がひっそりかかっているのです。

娘が案内書を片手に、ここはソルボンヌ大学、と教えてくれました。

ソルボンヌ大学、ということで記憶にあるのは、ポーランド出身のマリー・キュリー夫人が学んだ大学、ということです。

このソルボンヌ大学はさすが、とても大きな大学でした。

大きな、と言つても、どの建物も、巨大なビルではないので、横に長い建物なのです。

フランスは、通りが汚い、とフランスに行った人はよく言います。汚いところもあるにはありましたが。それほど汚いとは思いませんでした。この朝は、ゴミ収集車が出動していました。

道路にある大きな緑色のゴミ箱に詰められたゴミ袋を、日本と同じような収集車がどんどん運んでいきます。

ゴミ収集車にゴミを運んでいる人は、白人二人と黒人男性の三人でした。この人たちも陽気。なんだかおしゃべりしながら、元気に働いていました。

カフェの前の道路で、たくさん飲み物の瓶の入ったケースを車から降ろしている男性にも出会いました。この人も口笛をふきながら、なんだか楽しそうに働いていました。



カルチュラタンの本やの前



カルチュラタン・第5大学?

さて、大通りにある一軒の本屋さんに、行列ができるていました。まだ開店しないようです。何だろうなあ、と不思議に思いましたが、なにか評判の本の発売日なのかなあ、村上春樹の「1Q84」のような…、等と思いました。(私は、村上ファンなのですが、いさきかへそ曲がりで、流行りにそっぽ向く傾向があり、まだ読んでいません。古本屋で安くなつてから買うつもり…)

この日のカルチエ・ラタンは静かでしたが、この学生街でも、学生たちが、なにがあると、よくデモをしたりするところのようです。

この午前中、そうやって歩いていて、道端に市がたつているのに出くわしました。

仮のテント屋根の下に、ほんとうにまるで大阪かバンコクのような、板を乗せた台の上に商品を並べたり、吊つたりしている小さい店がぎっしり。衣類から食糧まで、さまざまです。たのしそうだったのでもうあまり時間がありませんでしたが、急いで見て回りました。そこで、大きなきゅうりとトマトを買いました。

買う仕事は、ほぼ娘ですが、このときは、短時間ですが娘と別行動で、私ひとりだったので、ボディ(体)で、会話? しました。

これとこれ、つて指でさせばいいのです。お金は、どの硬貨がいくらなのかわからぬので、ありつたけの小銭を差し出すと、ちょうどになるお金を取つてくれました。

言葉が通じなくとも、これでOK。

大急ぎで、ちょっと有名な由緒あるパン屋さん

にも寄つてパンを、自宅用のお土産に買いました。



しにせのパンやさん。

こうして、パリ五日目の日もたくさん歩いて、たのしかつたです。

娘のおかげで、まるでパリ市民になつたような気分を味わわせてもらいました。

大急ぎで宿にもどり、いよいよ空港へ。

## 帰国のハプニング

大急ぎでふたたび空港に行つたのに、空港では、飛行機がずいぶん遅れるとのこと。午後一時半に出発予定の飛行機が、午後五時半出発になつてしましました。航空会社が、空港内のレストランで食事を用意してくれました。

帰りの飛行機も、幸運にも窓際の席でした。

高度、一万メートルほど。速度は、時速千キロ。外気の温度は、マイナス四〇度前後です。

この夜は、とても晴れていて、飛行機から下界の景色がとてもよく見えました。

河がとてつもなく蛇行している様子が見えます。

アゾフ海、黒海、が見えました。

窓の真正面に北斗七星が見えました。眼の下の雲海の中

で、稻光がしました。

黒海を越えると、今度はカスピ海。

座席の前のテレビで、大体の位置を地図入りで教えてくれるので、分かるのです。

暗くなると、下界の灯りがとてもよく見えます。海や山脈は真っ暗です。

やがて、ネペールを超えます。ヒマラヤ山脈と見える黒い帯と帶の間に、ちらちらと灯りが見えます。

パキスタンかと思うと、まもなくベンガル湾です。

このとき、パリは夜中の二時五五分。バンコク時間は七時五五分。パリとバンコクの時差は五時間です。

バンコクに着いたのが、十六日の午前九時半でした。ところが、日本に帰る飛行機の出発時間は、なんとその夜の十時すぎだというのです。つまり、ちょうど朝から夕方まで半日以上、バンコクに滞在することになつたわけです。

十六日の午後四時ごろに成田に着く予定だつたのに、十七

日の朝の到着になつてしまいました。

あとで、聞いたところによると、パリで遅れたのは、い

よいよヴァカンスに入つて、飛行機ラッシュで、空港で処理できなかつたためだとか。ともあれ、飛行機会社は、遅れたお詫びにと、空港近くのホテルを、乗客のために用意

してくれました。行ってみると、パリの安宿とは、まるで大違ひの眼をむくような超高級ホテルです。とても広い部屋に、立派な浴室がついています。浴室と洗面室だけで、六畳は優にあります。

また、食事はバイキング方式ですが、洋食、日本食、中華料理、タイ料理など、何種類あるかわからないほどです。デザートだけでも、三〇種類ぐらいあると見ました。だって、ケーキだけでも、一〇種類ぐらいあるのですから。ここで、昼、夕の三食いただきました。ボーイさんもたくさんいて、さつと片づけてくれます。

お金持ちもいるもんです。

さて、前夜あまり眠れなくて、寝不足ですが、せっかくバンコクで一日過ごせるのです。仮眠もしないで、街に出ることにしました。

## バンコク－カオサン通りへ

超高級ホテルから街に出たとたん、貧乏旅行。娘は昔タイに何度も旅行したことがありますので、わりあいタイのことは知っています。

夕方までに帰らなければならないので、あまり時間はあ

りません。バスだと時間がかかりすぎる、そこで、タクシ－で「カオサン通り」というところに行こう、ということになりました。

タクシー乗り場について、娘、タクシーの運転手さんにおよその運賃を聞くと、考える時間もあらばこそ、私たちのあとからタクシー乗り場にやってきた、外国人の夫婦の旅行者に、タクシーの相乗りを提案。OKがとれて、その方たちといっしょにカオサン通りにいくことになりました。少し遠いと見えて、タクシーは二千五百円位かかると、運転手さんに言われたそうでした。娘のあまりの手際のよさに、感心するやら、びっくりするやら。

タクシーの中でお聞きしたところ、そのご夫婦は、フランスのリヨンから来た方たちでした。カオサン通りまで三〇分ぐらいもかかりますので、その間、いろいろ話してくださいました。私も半分くらいわかつたかなと思います。わからないところは、娘に聞きました。

お二人は、フランスの小学校の教師でした。ヴァカンスで、六週間！も旅行するのだそうです。日本の学校の先生に聞かせたい話です。

前の年の旅行は、カンボジアだったそうです。今回はタイのチェンマイから、ラオスに行くとのことでした。

「EUになつて、ビザはもういらなくなつたのですか」と聞くと、ほとんどフリー・パスだとのこと。IDカードは持つているけど、税関でも、ろくに見ないそうです。

奥さんの方が、「でもね、フリー・パスになつて、旅がロマンティックでなくなつてしまつたわ」というようなことを言わっていました。なるほど、そういうものかも知れないな、と思つたことです。

こうして、無事お安く、たのしく、カオサン通りに到着。お二人は、カオサン通りの中の宿にお泊りでしたので、その入り口で分かれました。

ヨーロッパの人達は、このカオサン通りのようなくちやくちやの街が好きなのかしら、と思ったことです。ここは、ほんとうに外国人のお気に入りの街のようで、街には欧米人と見える観光客でいっぱいでした。

カオサン通りは、屋台の街です。また、普通の商店の前の歩道にも、テント小屋がぎっしり並んでいて、歩く道は、すれ違うのがやつと、という狭さです。

食べ物、衣類、雑貨、その他なんでも売つている、ともにぎやかな街です。たしかに、見て歩いているだけで飽きません。

道路には、昔の日本の輪タク、つまり二輪タクシーも、人待ち顔にずらり。

通りにスーパーもあつたので、娘はタイの食料品をおみやげに買い、私は、屋台の店で、タイの少数民族の人達が作つたと思われる、丁寧な刺繡のついた小さな袋類を買いました。娘がトイレに行つている間、このおみやげ屋さんで働いている若い女性とちょっとおしゃべり。たどたどしい片言の英語で、です。

娘さんはまだ独身で、四十歳だそう。なんだ、うちの娘もそうなのよ、早く結婚してほしいんだけど、と言うと、結婚なんて、と娘さんは言います。今がハッピイだから、別に結婚なんてしなくていいわ、というようなことを言うのです。タイでも、結婚しない症候群が流行つてゐるのかなあ、と思いました。きれいな娘さんでした。

暑かつたので、屋台のマンゴーを一切れずつ買って食べましたが、とてもおいしかったです。

思えば、パリにもテント屋根の、雑多な市があつたわけですし、大阪にも、こんな風な、気取らない、小さな店がぎっしり集まつた街があります。

ほんまに、パリもバンコクも大阪も変わへんなあ、人



マンゴー売りのお兄さん



お店のきれいな娘さん

帰りのタクシーの中で、高速道路に入る手前の道路端に  
スラム街があつたのを眼にしました。

私も娘にタイにつれてきてもらったことがありました。娘が、タイに何度も遊びに来ていたのは、もう十五年以上のこと。この十五年でタイはすごいぶん変わったといいます。以前は、もちろん高速道路もなかつたし、あの超高級ホテルもなかつた。そもそも、タクシーの運転手さんだつて、あんなふうに、きちんとしたものを着たりしていなかつた、タクシーに冷房なんかなつた、などと言います。

つて、案外、人間がにぎやかにひしめいている、こんなところが好きなんかない、と思つたりしました。空港のそばの、あの高級ホテルには、人間の臭いがまったくしませんでしたが、ここでは、なんだか「生きている」という臭いが強烈です。

とは言え、タイも短期間で激しく進んだ経済成長のかげに、貧富の差、都市と農山村の差が開きすぎて、なにかと矛盾があるのでだろうかなあ、とあの空港占拠事件を思い起こしたことでした。

カオサン通りの近くに橋があつて、橋から眺めると、川の両側に並ぶのは、きれいな表の顔と違つて、お店の人達が住んでいる裏の住宅。なんだか貧しい雰囲気があります。カオサンの屋台の人達も店舗の人たちも、やはり、生きるのに必死で、小さな商いをやつてているのでしよう。

でも、人と人のつながりは濃く、強いものがあるようで、それが、街の活気を生み出しているような気がしました。

あまりゆつくりできなかつたのですが、ひととき、バンコクを味わつて、空港へ。

十七日の朝、東京に着きました。

## 鈍行列車はファーストクラス（特等席）

東京から松本に帰る時、はじめは、高速バスにしようと言っていた娘ですが、高速道路も混んでいるらしいと知つて、私のお気に入りの、鈍行の乗り継ぎで帰ることにしました。

娘も、鈍行列車が気に入ったのではないでしょうか。

鈍行列車で、向かい合つた四つの席を一人でゆつたり座つていて、娘が、狭い飛行機の中の席を思いだしてか、「ファーストクラスやなあ」と言つっていましたから。

ほんとうに、今や、ゆつたり座れる鈍行列車は「特等席」ナリなのです。

ちなみに、飛行機のファーストクラスは、ものすごくゆつたりとしていて、横にだってなれるのです！（エコノミー席の三倍くらいある感じです。）

乗り継ぎにそんなに苦労することなく、夕方前に松本について、ついに旅は終わったのでした。

なにか、特別なもののある、おもしろい旅ではありました。

## 【あとがき】

いつものことですが、うんと長くなつて、うんと遅くなつてしましました。

何も知らなかつたもので、どんどん読みたい本がでてきたり、調べなければならないことがでてきて、なかなか前に進みません。

でも、ずいぶん勉強になりましたし、勉強はおもしろかつたです。

若いころに、自分でテーマを決めて、いろいろ調べながら勉強する面白さを学んでいれば、もつと賢くなつただろうにナア、と思いました。

歳をとつて、あちこちガタがきて、記憶力もひとしおダメですし、ところが、好奇心だけは衰えないのが不思議です。知らなかつたことが少しでもわかるというのは、とてもたのしいことでした。

それにひきかえ思ふことは、受験勉強ほどくだらないものはない、ということです。点数のみを友達と競争する受験勉強なんて、人類をほろぼすものサヤア、と過激なことを言いたいくらいです。

考える力を育てたり、広い視野を身につけたり、あるいは、友人と助け合うことなどを学ばせないシステムは、子

供自身にとつても、社会にとつても損失でしかありません。  
：などと、またまた脱線。

さて、一回読んで、ノートまでとつても、しばらたつと  
読んだことをきれいさっぱり忘れているのは、悲しいかな、  
これも老化の進捗現象。でも、まもなく、あの空の世界  
に消え去つていく身なんだから、別に忘れても、いいサヤ  
ア、と、ちょっと仏教的に言つてみて、大いばり。（でも、  
内心は、あせっている…。）

さいごに、お笑いをおひとつ。

今回の超儉約旅行のすべての費用は、ふつうの半分ぐら  
いだったのでないでしょうか。知りたい方には、ぜんぶ  
でいくらぐらいだつたか、教えてさしあげましょう。

ついでに、白状いたしますと、こんどの降つてわいたお  
フランス旅行にあたつて、この五年ほどにためておいた、  
五〇〇円玉貯金缶を缶切りで開けました。五〇〇円玉でい  
っぱいになると、三〇万円たまる、という貯金缶です。缶  
の外側に、れいれいしく、三十万円と書いてあるものです。  
五年間の成績は五万五千円也でした。まあ一〇〇円玉や  
五〇円玉一〇円玉もかなり多かつたので、三十万円にはほ

ど遠くとも、かなり足しにはなつたのですけれど、実は、  
じやらじやらある小銭を、守銭奴！ のようにいつしょうけ  
んめい数えたら、八万円あつたので、周りの友人たちに大  
いばりしていたのに、銀行に持つていつたら、窓口の人に、  
「五万円しかありませんが…」と言われて、がっくり！  
なんども数えたのに！ きっと、どこか、穴が空いている  
にちがいない、頭のどこかに…。  
一枚、大判振る舞いで五千円札が入つていました。

さて、みなさん、長くなつてごめんなさい！



ショパンのお墓に行けなかつたのが、残念。  
今年はショパン生誕 200 年。こんなすてき  
な教会で、演奏会があるようです。

## ご案内 《 気づきのリトリート@安曇野 11月16~17日 》

ベトナムの禅僧、ティク・ナット・ハン師の教えをもとにした気づきのリトリートを行います。プラム・ビレッジ（ティク・ナット・ハン師のフランスにあるリトリート・センターの尼僧院長であるシスター・ジーナが今回のリトリートを指導してくださいます。また、シスター・ソアイと日本人のシスター・チャイもいらっしゃいます。

○日時／11月16日（火）13：30～17日（水）15：30

坐る瞑想、歩く瞑想、食事の瞑想、法話、分かち合いなどを行います。

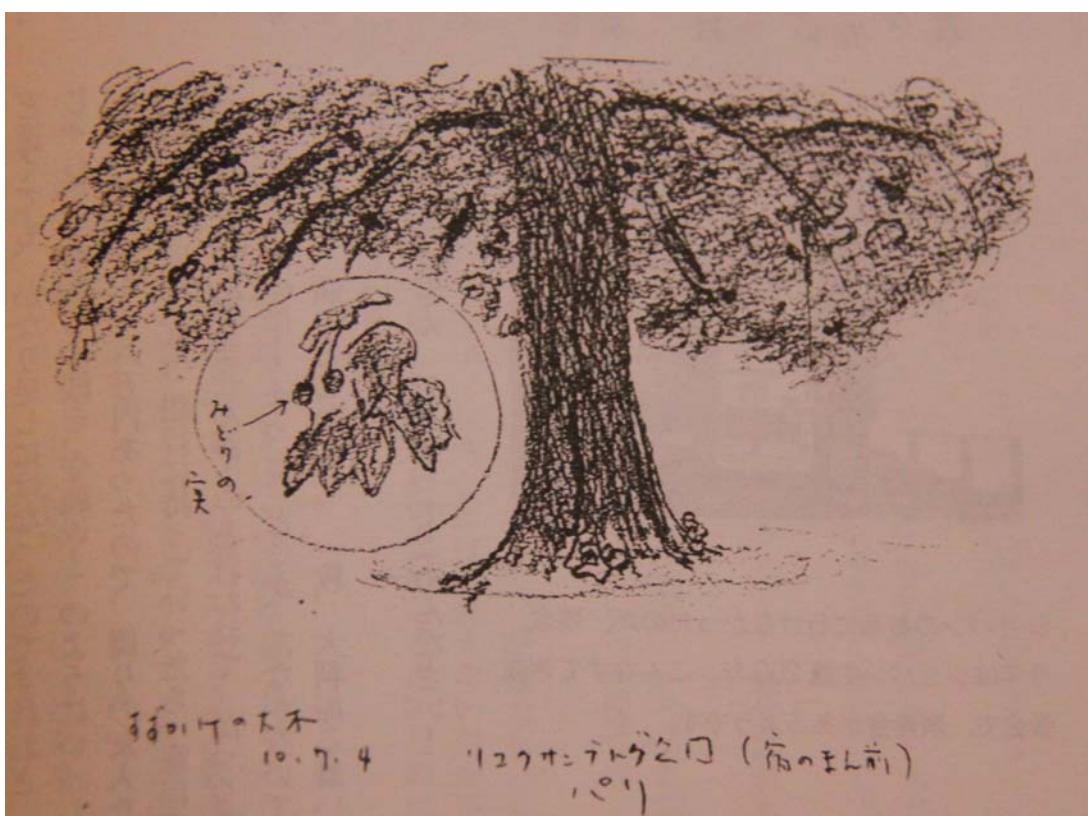
○場所／長野県池田町のシャンティクティと 成就院（シャンティクティより車で10分）

○参加費／2000円 ○宿泊費／3000円 ○食事／2000円

○申し込み・問い合わせ／メール：utayo\*y9.dion.ne.jp (\*を@に変更) 小田詩世

電話・ファクス：0261-62-0638 シャンティクティ 眞井朋子

○参加する方のお名前と連絡先住所、電話番号、宿泊形態（シャンティクティ or 成就院 or 宿泊なし）、交通手段（電車 or 車）を明記の上 メールかファクスで11月10日（水）までにお申し込みください。



パリの風景



バスと自転車だけの専用道路。タクシーもOKのよう。いいですねえ。



午後10時ごろでもまだ明るいパリ。  
ノートルダム寺院がみえます。



昔、私の子供のころ、一時はやった、スケーターが  
はやっていました。みんな、アイス食べ食べ…。



パリの郵便ポストは黄色でした。  
ポストにも落書きが…。



バンコク？ 大阪？いえいえ、  
パリの屋台市です。

- 「ねやの里だいよっ」 三十七回
- ・発行日 .. 10月10日
  - ・発行者 .. 小田巻茂子（栃東編集）
  - ・住所 .. 1111九九一七一〇一  
岐阜県安濃郡濃尾町明神東三井川四六一
  - ・TEL & fax .. 0263-62-5470
  - ・メール トーチューム .. [a-chiho@w5.dion.ne.jp](mailto:a-chiho@w5.dion.ne.jp)
- ☆郵送は希望の方は、お母へ手渡しでやる。
- 購読費 .. 年間（1冊～11冊） 1000円
- 不定期（年11回。やれやせ1回）

振込口座 .00540 - 1 - 95122 小田嶺耕十

300円